家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第七十一巻　第四号

お茶の水女子大学
昭和
47.6.20
受贈
附属図書館

4

日本幼稚園協会

昭和四十七年四月一日発行（毎月一回一日発行）
昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可
日本国有鉄道特別扱承認雑誌第六六三号
幼児の教育　第七十一巻　第四号

定評あるフレーベル館の新刊図書!!

音楽カリキュラムのための

新しい幼児の歌

〈全3巻〉

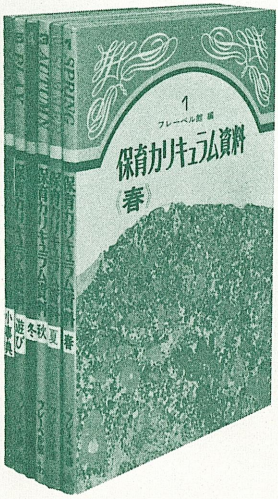
1…1学期用　2…2学期用　3…3学期用

ろばの会編

B5判　平均130頁　各巻550円

（送料 110円）

これからの幼児にはどんな歌を与え、どのように指導すればよいのでしょうか。従来の教材や音楽リズム指導のあり方に検討を加え、分析して編集されたのがこの「新しい幼児の歌」です。一年間の幼児の生活指導、行事、遊びなどを網羅し、使用の便宜上、各学期に分けてあります。各曲には、作曲家の解説がつき、さらに巻末にはベテランの幼児リズム研究家による詳しくわかりやすい導入法、展開法の解説がついています。



保育カリキュラム資料

〈全6巻〉

1…春　2…夏　3…秋

4…冬　5…遊び　6…小事典

B5判　136頁　各巻600円

（送料 110円）

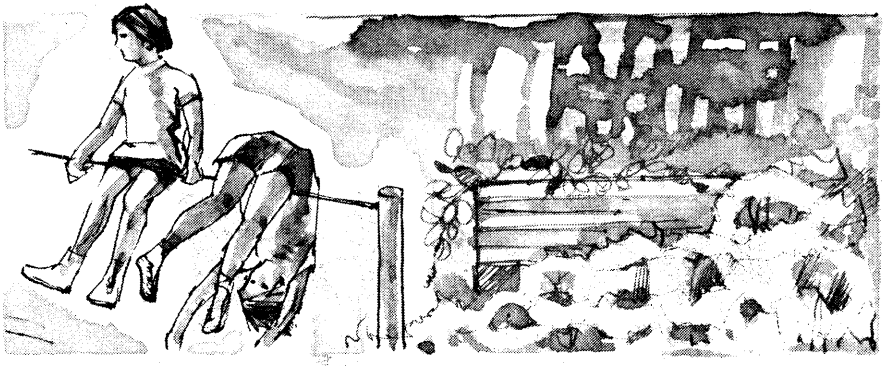
子どもは一時としてじっとしてはおりません。その一瞬一瞬を力いっぱい活動し生活しているのです。せっかく苦心して作り上げたカリキュラム表も、あっというまにくずされることもしばしばです。

そんなとき、いつ、どこででもすぐに役立つのがこの資料集です。あしたのカリキュラムのためのヒントを集めた、あなたのための保育ハンドブックです。

株式会社 フレーベル館

幼児の教育

第七十一巻　　第四号



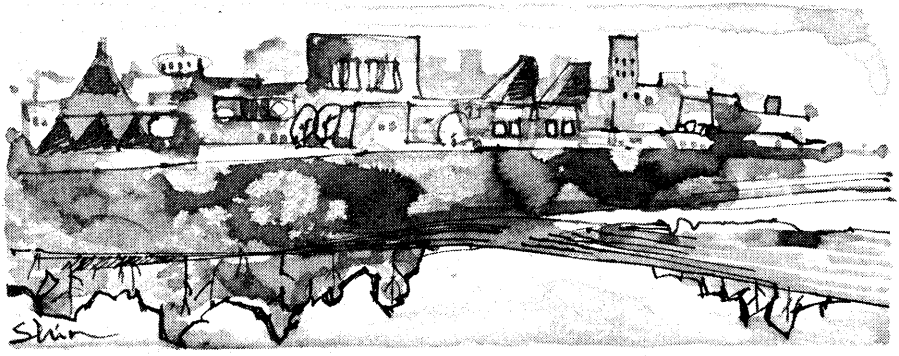
幼児の教育　目次

——第七十一巻　四月号——

表紙　園　房江
カット　斎藤信也

倉橋惣三選集より……（4）
ある〝思弁〟—七二年・正月の読書から……周郷　博…（5）
「子ども」というもの
—児童文学による「子ども」への接近—……本田和子…（8）
母親との対話
—ことばの教室—相談記録より……清原　敏…（17）
ある三歳児とその周辺……川崎千東…（23）

© 日本幼稚園協会
1972



交差保育法の実践・その一……宮沢キヨ子・大塚朝子
佐藤佳代子・相楽幸子
指導　大戸美也子…(32)

★こんな本・あんな本……小島直美…(39)
幼児と美術
―デザインから幼児へのアプローチ―……磯貝芳郎…(42)

★ユートピア……河井祥子…(48)
幼児の人物画について(一)
―性別の表現―……青木　隆…(50)

「ヨーロッパの幼稚園」
リヨンで見た言語教育……村石昭三…(64)
時の流れの中の人間
―二十年をへだてて見た米国、人・文化・教育―(1)…津守　真…(71)

この萠芽に対して

新しい萠芽を見ることは楽しい。また、その伸びてゆく力を思うことは嬉しい。しかし、その柔らかさと、弱さを前にして怖ろしさなしにはいられない。識らずして踏みにじりはしないか、誤って手折りはしないか、圧えて歪めはしないか、気づかっては胸のおののくのを禁じ得ない。

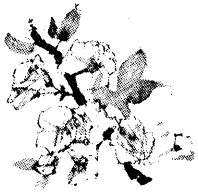
自然とや、生長とや、自然の力とや、それはむこうのことである。こちらとしては、はらはらとする怖ろしさのみが残る。むこうの力に任せて、こちらの心づかいを忘れるのは、鈍感か、怠慢か、横暴かに外ならない。

可憐なる幼児たちに見るこの萠芽に対して、怖れ戦く心、そのこまやかさに幼児教育の良心がある。

（倉橋惣三選集第三巻　育ての心　より）

ある〝思弁〟
——七二年、正月の読書から

周郷博



〝思弁〟——ということばは聞きなれない、日々の人生となんのかかわりもない、無縁なものと思う人がさぞおおいでしょう。それを〝詩〟とか〝哲学〟とかいうことばで言いかえてもいいのですが、それがいまの日本には「無さ過ぎる」のです。「知識」や「技術」や「社交術」ばかり過剰で、私は（私だけではない、と私は信じている）窒息しそうです。

私の敬愛する友、哲学者久野収は、日本脱出のことばを、こういうふうに語っていた。今ここの問題に関係のある部分だけを抜いてみる。日本が専門的知識という狭い——人間や全体とかかわりの切れた「ひとりよがりな」知識や技術におぼれ込んでいる、そんな「専門化の時代にはいったとき、ヨーロッパは新たな哲学的思弁の時代にかわっていた。第二次大戦の経験から、哲学者のあり方が問われる一方で、学際的な学問によらなければ解けない問題が出てきたからです」その通りだ、と私のある部分を「買ってくれて」いる久野さんのことばを私はうなずくように納得した。「学際的interdisciplinary」つまり、「専門」というワクを取り払って、それを越えて安易、気短かな結論をいそぐのではなく、〝思弁〟の世界にはいり、それを「受けて立つ」心、覚悟が必須になってきているのです。

このような〝精神的な〟点で、日本は経済大国かもしら

んが、世界の孤児、アジアの孤児――孤児を自覚しない。ときに「かわい気を感じさせない孤児」のように思われる。中国のことを考えてみると、その距りに仰天せざるをえない。

こんなことをならべて、私はお母さんたちに無理難題を押しつけているのだろうか？　そうではない、と私は信じている。また、こんなことをいって、自分を高く見せよう、と思っているわけでもない。さらさら、ないのだ。わかってもらえるだろうか？　（心配！）

「己れを高くするものは低くされ、己れを低くするものは高くされるであろう」（マタイ、二三―一二）ということばは幼小なときから私の心の根にあって、今もある。罪、業のふかい人間ではあっても、このことについて私は人後に落ちないつもりだ。

私はこんな年齢になって、こんな〝乱世〟の時代に幼稚園長になった。なんと重荷か、と自分では思う。しかし「無事に」過ごせばいいなどとはどうしても思えない。「無事に」というのは私個人のことだけ、私の安全だけを考える、ということとしか思えない。私の無事が、日本の無事、安全なのかどうか。自分に向かって私はたえず問いかける。年賀状に、園長先生の考えに協力したい、あるいは今年こそは先生と話したいという宿願をのべてきた者もいた。「よろしく」などという社交術だけではなく――ともかく私はお母さんたちに私の考えているところをわからせたい、可能だ！　と信じて書いているのだ。

内田義彦さんの「社会認識の歩み」の中の、マキャベリの「君主論」解釈のくだりにでてくる「フォルトゥナ（運命）とヴィルトゥ（徳）という人生の二つの要因を扱った個所に、知識への接しかた、本の読みかたについて、こんな章句があった。子どもの見かた、成長（生成）発達の見かたとして「読みとって」ほしい、と私は思った。

「人間は、一方で運命に逃がれようもなくつきまとわれています。しかし同時に、これを統御することができる。いわば運命を素材とすれば、運命のことを知っていなければならん。第一、素材だって素直な木もあれば、どうしようもない木もある。が、どうしようもない、節だらけの木だからこそ使いものになるといったこともある。木を生かして使おうと思えば、木の言い分も聞かなければならん。相手方を知らず、馬鹿の一つ覚えで主観を押し通すといったやり方をやっちゃ、木も死んじゃうが、こっちも死んじゃ

う。それにまた、運命の女神はなうての気分屋です。端倪すべからざる気質をもつ。その時々の運命の姿態を見て、それに応ずる手が打てなければ、主体といったって、こっちが死体だ。」それにつづいて「音楽の知識」よりも「音楽を聞くこと」音楽を聞く耳――「だれのなんという曲か知らんけれども、このところが私は好きだという形で聞くこと。それが手はじめです。」と内田さんが言ってる。その「運命」や「音楽」のようなものに向かう「徳」「聞く耳」を、私たちはどうやってもつことができるか。

藤堂明保氏の「中国」を読んだ。その中にでてくる「天理人道」つまり「人間論」がいまの中国を生かし運かしているエネルギーの哲学（思弁―行動）だと藤堂さんは書いている。「力の論理」や「政治のかけひき」のことよりも、「何が人間らしい生き方かという模索のほうがはるかに大事なことだと思う。」私も、力量、器量は及ばずながら、教育学（哲学）を他人とは一風変わって〝孤独にも〟その線のうえで求めつづけてきた。疲れた、と思うこともある。しかし〝真理〟が私を疲れさせず、生きかえらせてくれる。〝真理〟とはなにか？　音、音ずれ……バッハの曲のような、ワーズワースの詩のような音、〝ことば〟……。

シモーヌ・ヴェィユの晩年、ロンドンから急行で一時間ほどのケント州アッシュフォードのサナトリウムで一九四三年の八月二十四日に餓死する直前のことば。

「あるコント。――ギザールというナイチンゲール（つぐみ科の候鳥）。その鳥はどこへ行けば声が聞けるか。それは私にはわからない。私の知ってることは、その歌が、人間がきいた歌の中で最も美しい歌だということだけです。――すばらしきこと。その名と、その完成さしか知らぬ一つの存在。それだけでそのものを見いだすのに十分なもの。それが神だ。」

私たちは、この能力、知恵を失っている!?　一九七〇年の九月初め、私はロンドンから汽車に乗って、快い苦労のすえ、シモーヌ・ヴェィユの墓をたずねた。深い感動、よろこびが今も私の脈の中によみがえる。ともかく変わっている人間だ、と自分でも思う。お母さんたちよ、こんな私をわかってくれるか。

（お茶の水女子大学附属幼稚園ＰＴＡ機関誌より）

「子ども」というもの
―児童文学による「子ども」への接近―

本田和子

――稚児を見よ。其目の清しきはみ空の星の如く、其頬のふくよかに麗はしきは、なべての花にも木の実にも劣らず。物見るに怖れといふものを知らず、泣くにも笑むにもわが心のまゝにて、欲しと思ふ物あれば手をさしのぶるに誰憚ることなし。神の如き無邪気とは之なるべし。

石川啄木「一握の砂（感想）」より――

子どもの存在は、人間が生き続けるために欠くことのできないものであった。子どもを、「生命」や「成長」の象徴ととらえて、そこに生きる望みを託そうとする人間の姿は、その歴史の中に姿を変え、よそおいを新たにしては、くり返し現われている。

自らの肉と血によってつくられた「子ども」の誕生は、「死と滅び」に向かう個人の歩みの中で、まさに「よみがえり、再生」としてとらえられる望みに充ちた出来事であったろう。老いに向かう自らの肉身は、いつか消え去る日が訪れようとも、自らの生命を伝える存在は、もう新しい肉と霊をもって、この世に息づいている。その喜びにささえられて、人類はきびしい生を戦い続けてきたといえるのではないか。

とりわけ、文学にたずさわる人々、特に児童文学者とよばれる人々にとって、子どもの存在はまさに生の源泉そのものであった。

児童文学者にとって、子どもは二重の意味で、その生を

ささえるものとなっている。その一は、人類一般の願いと共通の基盤に立つものであり、今一つは、子どもによって見いだした「真の生」を、「言葉と文字」を借りて形象化することによって、自己を表現し、自らの生をより確かなものにしていくという意味である。

児童文学の作り手たちは、一般にいわれるような意味での「子どもの研究者」ではない。したがって、作家たちのすべてが、子どもを理解しようと努力しているとか、あるいは、その発達と教育を真剣に志向しているなどと、断言することはできない。しかし、作家たちがその直感力に依存して子どもをとらえたその筆は、意外な確かさで子どもの生きる姿を浮き彫りにしている。それは、「内なるかわき」に促され、おのれの全存在をかけてなされた「子どもへの接近」によって、はからずももたらされた成果とみることができよう。

そのゆえに、児童文学は、文化財として子どもの生活に位置づくのみでなく、「子どもの生きる姿を伝えるもの」「子どもとおとなのかかわり合いを反映するもの」としての役割を、になうことになる。私どもは、作品を通して「子どもにとって子どもとは何か」ということ、および「おとなにとって子どもとはどんな存在であるのか」ということを、問い直していくことができよう。

ここでは、二、三の作品を手がかりとしながら、この問題を考えていくこととする。

◆「ピーター・パン」と仲間たち

――おとぎの国とひと口に言っても、いろんなおとぎの国があります。たとえば、ジョンのおとぎの国には、湖があって、その上を紅ヅルがとんでいます。ジョンは、その紅ヅルをねらって、矢をいるのです。ところが、まだとても小さいマイケルのおとぎの国は、紅ヅルがあって、その上を湖がとんでいるのです。――J・M・バリ、厨川圭子訳「ピーター・パン」岩波書店より――

作者バリの「幼い日への飢え」は、永遠に育つことのない主人公ピーターを生み出し、「子どもだけが入国を許される不思議な王国」や、「子ども時代にのみ訪れる生の喜び」を作品の中に描き上げた。二十世紀初頭の英国が生み出したこの物語は、作品の真価は別として「幼い日への飢え」を満たすものとして、異常なまでの人気にささえられ、世界中にその仲間を広げていった。

「ピーター・パン」の支持者たちは、大別して二つのグループに分けることができる。

一つの群れは、ウエンディやマイケルと共に「おとぎの国」を訪れ、海賊フックとの戦いや人魚の湖での冒険に心をおどらせる「子どもの読者」と、「読者である子どもの喜ぶものを共に喜ぶおとなたち」であり、他の一つは、「自由と喜びにあふれた幼い日への憧憬」を、作品の中で満たそうとするおとなたちである。

前者にとって、作品の魅力は、ピーターの奇抜なふるまいや勇敢さであり、妖精ティンクのいたずらや海賊フックの荒々しさと間抜けさ、あるいは時計を飲みこんだためチクタクと時を刻み続けるわになどである。そして何よりも、おとぎの島で繰り広げられる子どもたちと海賊とインディアンとわにとの、スリリングな戦いである。しかし、後者にとっては、それらにもまして心を打たれる部分がある。それは、「子ども」および「子どもの心の世界」について、作者が語る細々としたことがらなのである。先に引用した「子どもは一人々々、その子なりの王国を持っている」という一節もその例である。

作品の中には、ピーターの他にも大勢の子どもたちが登場する。寝室の窓からとび出して、「おとぎの島」にやってくるウエンディらの三人姉弟や、公園で迷子になって島へ送られてきた数名の男の子などである。それらの子どもの群れの中にいて、ピーターは、常に他と異なるユニークさで描かれる。

――ピーターは三人なんかより、よっぽど早くとべるので、冒険をしに、いきなりどこかへ消えてなくなることがあります。みんなは仲間に入れてもらえないのです。ピーターは、星ととてつもなくこっけいな話でもしていたのか、笑いながら、降りてくることがありました。でも、その話が何だったのか、もう忘れているのです。かと思うと、人魚のうろこを、まだからだにくっつけたまま、あがってくることもありました。そのくせ、いったいどんなことがあったのか、はっきりと報告することができないのです。

――前掲書より――

現在の瞬間に全存在をかけて行為するピーター、そして、その自分の瞬間的な生活行為のあれこれを、言葉のレベルに抽象化し、過去の次元に配列し直して、他人にわかるように報告することなど決してできないピーターの姿は、現在に滞在して感覚と運動に生きる子どもの姿の象徴でもある。

――ピーターは、なんでも思い立ちます。「スライトリー、医者をつれてこい。」

「かしこまりました。」と、とっさに答えて、頭をかきかき、むこうへゆきました。でも、ピーターのいいつけには、したがわなくてはなりません。ジョンの帽子をかぶり、もったいぶった顔をして、すぐもどってきました。

「あの、もし、お医者さまでしょうか?」と、ピーターは、スライトリーに近づきながら、ききました。

こんな時に、ピーターとほかの子どものちがうところは、みんなは「うそっこ」だということを知っていますが、ピーターにとっては、「うそっこ」と「ほんもの」とは、まったくおなじなのです。これが時々、みんなを閉口させるのです。

――前掲書より――

「うそっこ」とは、想像上の状況に展開される遊戯行為であり、「ほんもの」とは現実の生活行為である。作者は、遊戯行為に生きる姿を子どもの典型ととらえ、それをピーターに託したのである。

――今度の遊びというのは、冒険をしないふりをすることです。ジョンやマイケルが昔ずっとしていたようなことを、するのです。腰かけにすわって、空中にボールをなげたり、おしっくらをしたり、散歩にでても、灰色グマ一匹すら殺さずに、もどってきたりするのです。ピーターが腰かけにすわって、何もしないでいるのは、なかなかの見ものでした。そんな時、ピーターは、もったいぶった顔をしないではいられません。じっとすわっているなんて、ピーターにとっては、まったく、こっけいじみていたのです。

――前掲書より――

子どもにとって、「冒険をしない」ということは大変な「冒険」である。おとなを驚かせうろたえさせるような、常識のわくを越えたことがらこそ、子どもの日常性なのである。おとなの要求する「無難で常識的な生活」は、灰色グマを殺すこと以上に困難であり、珍しいことなのである。

ピーターは冒険に生き甲斐を感じている。海賊フックとの命がけの一騎討ちで、彼が感じたのは、まじりっけのない喜び、ただそれだけであった。しかし、そのピーターが、気も遠くなるほどの混乱と恐れに立ちすくむ場面がある。

――その時、ピーターは、自分がフックより岩の高いところに立っているのに気がついて、これでは、正々堂々と戦ったことにならない、と思って、フックを助け上げようと、

片手をのばしました。

その時です。フックは、ピーターをかみました。

その痛みのためというより、フックの不当なおこないに、ピーターは、めまいを覚えました。どうしたらいいのか、わからなくなってしまいました。ピーターはただ、おそろしそうに、じっとフックを見つめているだけでした。どの子でも、はじめて不当な扱いをされた時、こんなふうに心が傷つくものです。子どもが親しげに、相手に近よっていった時、子どもは、相手から当然正当な扱いだけをうけるものと、期待しているのです。

——前掲書より——

子どもたちはいつも、周囲から正しく扱われることを望んでいる。子どもの論理の道すじは一本で真すぐに延びている。ピーターは、自身の騎士的な振舞に対して、フックがずるがしこく邪悪な敵意で報いようとは、想像すらできなかった。なぜ、フックは自分にかみついたのか、鉄のかぎは、なぜ自分を傷つけるのか。茫然とたたずむピーターの姿には、人間界の「裏切り」に出会って、驚きおののく子どもの心が象徴されている。

こうして、バリは、ピーターを通して「子どもの中の最も子ども的なもの」をできるかぎり描き出そうと試みた。それは、「成長の過程で、加速度的に失われていく人間の純粋性」といいかえることもできよう。

そして、彼は、子どもの本質を究極的には「無垢の信じる心」におこうとしている。

——「だからね」とピーターは、しんせつに話をつづけます。「どの男の子にも、女の子にも、ひとりずつ妖精がいるべきなんだよ」「いるべきですって？じゃ、ほんとうはいないの？」

「いないんだ。このごろの子どもって、いろんなことを知ってるだろう、すぐ妖精のことなんか信じなくなっちゃうんだ。そして、子どもが『妖精なんて、信じないや』って言うたびに、どこかで、妖精がぶったおれて、死んじゃうのさ」

——前掲書より——

妖精は子どもらの「信じる心」の所産であり、その存在を信じる者にとってのみ、実在である。

——ティンクの声があんまり小さいので、はじめのうちは、何を言っているのか、わかりませんでしたが、やっと、わかりました。もしも子どもたちが妖精を信じるなら、きっ

とまた、もと通り元気になると思う、と言ったのです。

ピーターは、さっと両手をのばして、呼びかけました。そこには、ひとりも子どもがいませんし、しかも夜中でした。けれどピーターは、今「おとぎの国」の夢を見ているかもしれない子どもたち、それだから、みなさんが考えるよりか、ずっとピーターの近くにいるかもしれない子どもたち、ぜんぶに向かって、呼びかけました。――

――「もしみなさんが信じるなら、手をたたいてください。ティンクを死なさないでください。」と、ピーターは、子どもたちに大声で呼びかけました。

大ぜいの子が手をたたきました。

――前掲書より――

英国の恒例のクリスマス公演においても、舞台の端に立ったピーター役者が客席に手をのべて呼びかけると、客席からは拍手のうずがわき起こるといわれている。

作者バリは、索ばくたるおとなの生の中で、満たされることのないかわきを、「幼い時代をうたい上げること」でいやそうとした。その結果、作品は、郷愁と憧憬と、そして感傷の文学となり、児童文学としての評価はその感傷性のゆえに、必ずしも高いとはいい難い。事実、この作品をさえ、広めたのはおとなたちであった。おとなたちがこの作品に寄せた熱い思いは、「おとなにとって子どもとはどういう存在なのか」という問いに対して、一つの答えを示してくれるものとなる。

子どもが、果たして「純粋」であり「無垢」であるか否かはここでは問うまい。少なくとも、その最も子ども的なところ、たとえば「現在の瞬間に生き、いきいきと動き廻る存在であり、常に善意を期待している」などの特色のゆえに、そして、何よりもその「見えぬものを信じる心」のゆえに、おとなの救いであり、導きの星だったのであった。

◆「ナルニヤ国」の子どもたち

アダムとイブの末なる人間の子どもたちが、偉大なライオンのアスランによって作られた神秘の国ナルニアで、その創造の時からさまざまな冒険に遭遇し、遂にはその滅亡にまで立ち会う壮大な物語全七巻が、英国の神学者C・S・ルイスによって世に贈られた。一九五〇年から七年間にわたる出来事である。

ナルニアは、この地上ではないどこかにある「別の世界」であり、「この世の空間をどこまで進んでいっても決してい

きつくことのない」世界なのである。この世界とは異なる時間の下に生成し、この宇宙とは異なる空間の中に成立する国である。

そして、その幻想の国は、そこを訪れた子どもたちにとっては、「ナルニアこそまことの生の場所」であり、そこでこそ「本ものの、自分としての生活」の許される世界であった。子どもたちがナルニアに滞在する時、現実の世界の時間は一秒も経過しないが、逆に、子どもたちがこちらの世界で暮らしている時、ナルニアの時間はナルニア流の時を刻んでいる。こちらの世界で一年が経過した時、ナルニアでは数世紀の歴史が流れていたりする。子どもたちにとっては、ナルニアこそ「実在の国」であり、この世は自分たちが直接触れていなければその存在すら確かではない。幻の国である。

しかし、そのナルニアへは、子どもたちの意志だけで到達することができない。ナルニアにとって、人間の子どもの協力が必要な時にのみ、偉大なライオンのアスランの召しによって、そこに呼びよせられるのである。衣装だんすの中を通ったり、壁にかかった絵の中にとびこんだり、その通路はさまざまであるが、いずれも、子どもたちの予期していないときに、思いがけない方法で、ナルニアに到着しているのであった。

最初の物語「魔術師のおい」に登場するアンドルーおじは、自分の研究した魔術によって「別の世界」への脱出を試みる。そして、魔法の指輪によってこの世界を抜け出した子どもたちは、「この世ではないところ」に到着する。そこは「世界と世界のあいだの林」であり、どこの世界にも属さず何事も起こらない。限りなく平和で、限りなく静かで、まどろむしかない世界である。アンドルーおじの魔法によって到達したこの場所は、人間の知恵と力の限界を示している。すなわち、人間の力で到達できるのは「あいだの林」までであり、「本当の別の世界」に到達するためには、今一つ、別の意志・別の力が必要なのである。

人間はすべて生きとし生ける者の王たるべくさだめられ、ナルニアの王座も、アダムとイブの末によって占められる運命にある。人間は、すべての者にまさる知恵をもち、王者たるべき力をもつが、その知恵と力は、より大いなる意志によって方向づけられる時にのみ、よりよく発揮されるのである。

ところで、この大いなる意志との出会いはどのようにし

てなされるのであろうか。作者ルイスは、それを人間、特に子どもの中にある「よりたのむ心」によってなされるとしている。物語の中で自分以外の、あらゆるものを信じることをやめてしまった小人たちには、青空も光も見えなくなり、アスランの姿もそのかぐわしいいぶきも感じることができない。ただ、疑いと不満の薄暗がりの中に、地面を見つめてうずくまり続ける。

人間の子どもたちの中で、常にいち早く、アスランの姿を見いだし、その導きに従おうとするのは、いつも年下の子どもである。たとえば、ピーターたち四人が峡谷の中で道を見失ったとき、幼い妹のルーシーは、ちらりと光ったアスランの影を誰よりも早く認め、迷うことなく、道をそちらに選ぼうとした。しかし、他の兄弟たちの反対でそれを果たさず、道に迷ったまま野宿する。一眠りしたルーシーは、自分の名前を呼ぶかすかな声に目を覚まさせられる。誰の声か思い出せないが、この世で一番なつかしい、一番好きな人の声である。ルーシーは恐れ気もなく、一人で深夜の森にわけ入り、「大好きなアスラン」に出会うのである。疑うことも惑うこともしない「よりたのむ心」がそこに描かれている。

ナルニアは、「幼な子の如くあらずんば入ることを得ない」国である。子どもたちは、成長と共に、ナルニアを訪れる権利を失っていく。まず、ピーターとスーザンが、やがてエドマンドもルーシーまでも、「もはや年をとりすぎ、自分たちの世界によくなじんで暮していかねばならない」として、ナルニアを訪れる機会を失っていく。おとなになるということは、神秘の国を失うことなのであった。

魔法は、「よりたのむもの、信じるものにのみ働く」という原則をもち、ファンタジーの世界はこの原則の上に成り立っている。「ピーター・パン」も「メアリー・ポピンズ」も、すべて幼い子どものみが入国を許された幻想の国で物語が展開し、子どもたちがおとなになった時、それらの世界は姿を消していくのである。「天国へはいる」ことができ、「神を見る」ことを許された幼い魂は、また、「魔法を信じ」「ファンタジーの国の住人たり得る」資格の所有者でもあるのだ。

作者ルイスが、人間の中に求めたのは、この「よりたのむ心」だったのではないか。そして「よりたのむ心の持ち主」の典型として立ち現われたのが、「子どもという人間」だったのである。ルイスは、子どもの中に人間の原型を見

いだし、子どもを描くことによって、最も根源的な人のあり方を写し出そうとしたのではなかったか。

ルイスの立場は、「子どもに何かを伝える」とか、「子どものためによい材料を提供する」というところからは遠い。彼自らの語るところによれば、澎湃とわき上がるイメージの群れが、次々とまとまって、連作の筆をとらずにはいられなかった。その結果、作者の全存在を貫く強い信仰と、全存在をかけてなされる人間への求めとが、自ら基調となってイメージの流れを導き、かくも壮麗なファンタジーの世界が作り上げられたのである。

作者にとって、子どもおよびそのかかわる世界は、描かずにいられない人間の「真の生の姿」であった。まことの生もまことの死も、永遠の未来も、子どもの姿を借りるときにのみ、最もよくその形を現わすことができたのである。

物語の最後は、ナルニアと関係し、ナルニアを愛したすべての人々の「死」によって終わっている。すなわち、成長のゆえに、再びナルニアを訪れる資格を失ったポリーやディゴリー、あるいはピーターたち四人の兄弟姉妹が、現実の世界で「死」に遭遇することによって、「まことのナルニア」で「永遠の生」を得るのである。

ルイスも、バリやその他の英国の作家たちの例にもれず、「子ども時代」に永遠の憧憬をよせ、そこに「生の源泉」を見いだした一人なのであろう。「子ども時代」は、おとなにとって、「失われた世界」であり「再びもどらぬ時間」である。この「子ども時代」の回復のために、現実の時間を超えた「別の時間」と、滅亡したナルニアに代る「まことのナルニア」が設定され、そこでは、すべてのよき人々が「永遠の生」を得るとしたのではないか。

子どもこそ「よりたのむ心」のままに、生きとし生けるもののすべてと手を組み合って、喜びにあふれて生きていく存在である。子どもたちが、「もの言うけものや木々」と共に、「自分らしく」生活できるナルニアは、すべての人間にとって「まことの生の場所」なのである。

——彼らはどんな目にあっても心の明るさは失わない。この世に生きている彼らの使命は、この世にふたたび信仰と希望をもたらすことである。もしも人間の精神が、この自信に満ちた若い力によっていつもよみがえらされることがなかったなら、いったい、どうなっていたであろうか。

——ポール・アザール、矢崎・横山訳「本・子ども・大人」——

（お茶の水女子大学）

母親との対話

—ことばの教室—

相談記録より

清　原　　敏

母親との対話

その1　A子・三歳十一ヵ月・脳性まひ

A子、母親の手をはなれて、声をあげて笑いながらへやにかけこんでくる。早速遊具に興味を示し遊び始める。右足を軽くひきずってはいるが、表情も豊かで歩行もしっかりしている。

(1)×月×日

◆　A子ちゃんは、ずい分活発ですね。この間、お電話で伺った状態よりずっと元気なのでびっくりしましたよ。

M　そうですか。この子は仮死状態でうまれましてね。脳性まひと診断されてから私はきょうまで、ずっと心配のし通しなんです。将来のことが不安になって、何度も自殺を考えました。

◆　そんな弱気では、A子ちゃんがかわいそうですよ。おかあさんが元気を出してくださいね。脳性まひといっても、もっともっと重い方がたくさんいます。A子ちゃんは普通のお子さんとほとんど同じように何でもできるでしょう。

M　本当ですか。今までそんなふうに考えたことは一度もありませんでした。どこにも相談するところがないので、あれやこれや気にするだけで……。それで、幼稚園に行く年齢にな

って困っているんですけれど、この子がはいるところがないんです。近くに施設に行っている人がいるので、そこに聞いてみたら、今は満員なのでもう少し待つようにいわれました。

◆ 施設というのは、どういうところですか。

M 重症の心身障害児の保育園なんです。

◆ A子ちゃんの入園のことで、普通の幼稚園や保育園に相談してみましたか。

M いいえ。そういうことは考えてもみませんでした。足がわるいし、ことばが出ないので無理だと思いこんでいましたから……。

◆ 普通の幼稚園にはいるには、A子ちゃんは、ころびやすいことや、医療の問題などで大勢の子どもたちの中では、目がとどかないということでことわられることがあるとは思いますが、相談に行かれるとよいと思います。医療の問題は主治医とよくご相談をなさることが大事ですね。おかあさんは少し、A子ちゃんの足のことや、ことばのことを重く考えすぎていらっしゃるようですがいかがですか。

M そういわれればそうかもしれませんね。

◆ A子ちゃんは、階段ののぼりおりもできるし、歩き方もしっかりしているでしょ。

M ええ、このごろは、私の手をはらってどんどん先にのぼろうとするんです…。たしかに私の方が考えすぎるところがあります。

脳性まひの子どもの教育に専念されているS先生にA子を紹介してみていただき、子どもの育て方についての注意や今後のことについて指導していただいた。

普通の幼稚園や保育園にA子の入園を相談してみたが、どこからも人手不足や園児数が多いという理由でことわられた。

(2) ×月×日

M 先生、この前は大分気持が楽になったんですけれど、しばらくたつとまた、いつものように心配ばかりしているんです。

◆ お家ではA子ちゃんとどういうふうに過ごしていらっしゃいますか。

M せまい部屋なので、遊ぶといってもたいしたことはできませんから、A子と二人でテレビを見たり、おもちゃで遊んだりするくらいです。

◆ A子ちゃんはテレビがすきですか。

M ええ、子どもの番組は一緒に声を出したり、音楽も好きで

リズムにあわせてからだをよく動かしています。

◆　公園に遊びにいらっしゃいますか。

M　いいえ、ほとんど外には出ないのです。

◆　公園やお宅の近くで、他の子どもたちと遊ぶようなことはありませんか。

M　ええ、この子は他の子よりも知恵もおくれているし、からだだけが大きくても、他のお子さんについていけないのではないかということが、すぐ心配になっちゃって……。それで家の外には出なくなってしまいます。

◆　他のお子さんたちと比較をしたり、A子ちゃんができないことを要求したりなどはしないことですね。おへやの中だけでなく戸外に出て、自由に遊ばせてあげるとよいと思います。他の子どもたちのいるところで遊んでいるうちに、お友だちもできてくるでしょう。今のA子ちゃんにとっては、そういうことがとても大切だと思いますよ。

M　そうでしょうか。知恵もおくれていて他の子どもとは違って、とんちんかんなことをするように思えますが……。

◆　A子ちゃんの遊び方を見ていてそれほど知恵がおくれているとは思えませんし、ことばだって、A子ちゃんがお友だちや人とのまじわりを体験していくことで、どんどん増えてくるでしょう。

M　どうもお話をきいているうちに、私もA子のことを頭からだめだと思いこんでいたところがあるような気がしてきました。子どものためにいろいろやってみることにします。

このあと、母親から施設の保育園があいたのではいった方がいいか、どうか迷っているという問い合わせがきた　どこにもはいれず、おかあさんと二人きりの状態よりは、そこへ行った方がいいだろうというS先生のご意見もあって、A子は入園した。

(3)×月×日

A子を伴ない、母親が明るい表情でやってきた。

M　先生、施設の保育園に入れてよかったと思います。はじめの二日間は、わあわあ泣いて私にくっついてはなれなかったのですが、三日目からひとりで歩いてカバンも自分でしょって通っています。今までは、外へ出ると、ぐずって歩かず、抱いてもらったりすることが多かったんですけれど、保育園がたのしくてたのしくて今度は家へ帰るのがいやだといって園で遊んでいるんですよ。

◆　それはよかったですね。そんなによろこんで……。おかあさんもいくらか安心なさいましたか。

M　はい。とても気が楽になって、私もうれしくなりました。ことばも、この前こちらに伺った時は、三〇ぐらいの単語をやっと話していたのですが、園にはいってから急にことばが増えてきて、注意してきいてみたら八〇ぐらいの単語をしゃべるようになりました。

◆　すばらしいですね。A子ちゃんの生活がどんどん広がってきて、もっともっと伸びてくるでしょう。

M　先生にいわれてから、公園などにもなるべく出るようにしています。A子も同じぐらいの年齢の子どものそばへ行きたがるんですね。他のお子さんのように、話はできませんが、お互いに何かわかるような顔をして遊んでいるのでびっくりしました。ああ、友だちが欲しいのかと思いました。私はそういう姿を見ると、いけないことですが、うまくしゃべれないA子が、不憫になってしまって、やっぱり連れてこなければよかったかな、なんてつい思っちゃうんです。

◆　おかあさんが、A子ちゃんをかわいそうだとか、他の子どもと比べて恥ずかしいなどと思っていらっしゃったら、正しい発達はできないと思いますよ。A子ちゃんはこれから伸びていくんだからと希望をもってA子ちゃんの生活を、たのしくしてあげることを考えてください。

M　よくわかったつもりでも、つい不憫になったり、自分のその時の気持でいらいらして怒ったりしてしまうんですが、これからは、もっとゆったりした気持でA子と遊んでやろうと思います。

この相談のあと、何度も母子で訪ねてくれたが、A子の成長ぶりは目をみはるほどで、ことばも大分出てきたし、運動も歩行も、ますますしっかりしてきた。ちょうどA子のいる保育園に出かける機会があったので、見学させてもらったが、A子は普通の幼稚園にはいった方が、もっと伸びるのではないかという感じをもった。

A子の家は、今度公団住宅に当選して、神奈川県に引越したが、どこを尋ねても、A子がはいれる幼稚園がない。

その2　B男・四歳七ヵ月

生後間もなくひきつけをおこして入院。検査などで入院が半年も延びた。相談所では、行動観察や反応の仕方などにより、聴力も正常らしい、知能は推定では大体I・Q、83ぐらいだろ

うという判定だった。「あっ、あ、あ」と声に出して自分の要求を伝えたり、最近は動作や手まねで言いたいことを表現するようになってきた。

B男が普通児のはいる保育園に通うようになったのは、六月からだったが、それからのB男は見違えるほど変わってきた。両親が働いているので、祖母とたった二人だけの生活から多勢の元気な友だちの中へはいっていったからだ。B男はよくわからないけれど、友だちにくっついて、広いホールをぐるぐる駆けたり、いたずらしたり、泣かされたり、思いきり笑ったり、ことばは相変わらず出なかったが、B男のいおうと思うことは友だちも結構わかってくれる。しかしどうしてもわかってもらえない時もある。そんな時は、一生懸命からだで、説明したり、あきらめたりする。

こういう楽しい毎日が続いていたある日、B男がたなのものをとろうとして台の上にのったが、誤って頭を打ってしまった。青い顔をして泣き出したB男は早速救急車で病院に連れていかれ、検査のため入院。これは別に何でもないということだった。二、三日してまた床ですべってころんだ。この時はたいしたことはなかったのだが、園側では、早急にB男を退園させるよう両親に迫った。たしかに園の先生たちの心配はよくわかるが、母親としては入園以来のB男のめざましい成長ぶりを思うと、退園の宣告は大変なショックであり、園の先生から、B男に適している公立の施設の保育園に紹介するといわれ、不安は一そうつのった。園の先生と、母親は再三話しあったが、園側は、B男がこのまま在園してもよいという医師の診断がないかぎり、通園してもらってはこまるということになった。母親はB男をずっとみていた主治医や専門家の意見を聞いて歩き、最終的に、主治医より「今までは、医療が主だったが、B男のこれからはリハビリテーションが主で、医療が従になる。それでこういう子どもは、集団にいれなければ伸びないと思う。他の子どもよりは、手はかかるかもしれない。園の受け入れ側の態勢だから医者としてお願いするしかない……」といわれた。

この主治医の証明で、B男は再び園に通えるようになり喜びいさんで毎日通園している。

最近B男は、いろいろな音を出すような遊びをするようになり、これがたいへん母親のはげみにもなっている。

その3　C男・五歳四ヵ月

M　きょうこちらに伺いましたのは、実はC男の幼稚園の先生

から「C男の発音がおかしいので、専門家にみてもらうように」と注意を受けたからなんですけど……。

○○小学校の難聴教室で聴力検査を受けましたが、正常とのことでこちらへ伺うよう紹介されました。

◆ 発音がおかしいというのは、具体的にどういうことですか。

M はい。私はそれほど気にしておりませんし、放っておけばなおると思っていたのですが、先生から注意されてから気をつけて聞いてみますと、サ行がタ行になることもあるようです。

◆ 特にことばについて、お気づきの点がありますか。

M 別にありませんが、私たち両親が鹿児島出身なので、家庭では鹿児島べんをつかっております。なにしろ鹿児島のことばは、東京の人が聞けば外国語のように感じられるでしょうから、そんなことも影響したのではないかと思います。

それからこの子は主人の勤めの関係で生まれたのは名古屋で、三歳で大阪に移り幼稚園に一年間通ったのですが、関西べんを自由につかっておりました。それで五歳になってから東京に参りました。まだ東京に馴れていないこともあるのでしょうね。

そんなわけで、幼稚園の先生が、毎日十分ぐらいずつC男をのこしてことばの指導をしてくださっているのですが、このごろ少しどもりはじめたような感じなんです。

C男と、絵カード、録音ごっこなどで遊びながら観察をした結果、異常というほどの程度ではなかったので、母親に安心するように話し、母親が幼稚園の先生ともっとよく話しあうように伝えて帰した。その結果幼稚園でも、ことばの指導を中止され、連絡では、C男も現在では、東京のことばを自由にあやつって元気よく遊んでいるということである。

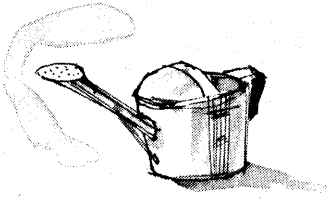
ある三歳児とその周辺

川崎千束

はじめに

Hは身体的に標準以下で出生し、かつ人工栄養児である。満四歳に達した現在でもまだ平均値に追いつけない発育状態ではあるが、扁桃腺炎で発熱するほかは、たえずからだを動かして遊びまわり機嫌よく元気である。しかし母親は彼の食事の摂取量が少ないことを口癖のように愚痴っていたので、集団生活の経験をもつまでは食事の真のよろこびを味わえないでいたように思われる。

父母、祖母、Hと四人の家族構成で、彼は長子であり現在のところひとりっ子である。祖母はHの育児は両親の義務と責任にあるべきだという基本的な考えに立って、両親の育児の方針について、とかくの口を入れないよう自称しているが、Hが発熱すると両親は時々意見が対立し、祖母の判断を求めにくる。父親は典型的な子煩悩であり、母親は保育科で机上の勉強だけはしたという経歴をもつものである。



人工栄養児であるためか、Hは二歳近くまでは母に抱かれるよりも祖母に抱かれる方を好んだ。母はやせ型であり、長子を抱くという未経験さから何となくぎごちなく、祖母は三人の子を育てたので抱き方にもなれと柔らかさがあるのであろう。彼は感覚的にそれをとらえて、むずがって泣く時も祖母との触れ合いを好んだ。感覚的なものがまず発達するということを祖母は承知していながらも、Hのこの

現象は心をかすめる不安なものであった。人工栄養児と若い母親とのこの関係は、Hの情緒の発達に支障をきたすことはないだろうかと。しかしこれは杞憂にすぎなかった。知能の発達につれ彼の愛の対象は母、父、祖母という順位に変わっていった。

祖母が反対した二つのこと

祖母が両親のやり方に断固として反対したものが二つある。

一つは歩行器であり、一つは描画に対する考え方である。彼が歩き始めた時、人手のないこともあって母親は夕食の支度時、または掃除洗濯の間など歩行器に入れるようになり、日を経るにしたがって入れる時間が長びいてゆく傾向になった。祖母が帰宅した時、喜んで近づいてくる歩行器のガラガラという音をきく度に、祖母は足かせをはめられた奴隷を思い浮かべてたまらない気持になった。歩行器から抱き上げ抱きおろすと、三足四足安定しない歩き方をしては転んだ。

〝これでよい〟祖母は断固としていった。

歩くということは、足をふんばり腰をささえ、歩いてはころびころんでは立とうとする。立って一歩をふみ出す努力と、忍耐と試行とが人格をつくり上げ、知恵をはぐくんでゆくのである。歩行器は安全そうであっても、その安易さにたよってかえって精神的な不安定を招くものである——と。

倉橋惣三著作集にあるミレーの第一歩についての先生のお言葉も引用して母親を説いた。

これは素直に受けいれられ翌日から彼はドタンバタンと歩く生活に変わり、ころぶ時、手をつくという知恵もわき出た。(歩行器から出したばかりは手をつくということを知らなかった)

描画の場合は、歩行器のように簡単にはゆかなかった。Hは一歳半近くになりクレヨンをにぎって、いわゆる掻画を描き始めた。誕生ごろはまだクレヨンをなめて困ったので、しばらくクレヨンを取りあげておいたが、くちびるがおもな触覚器でなくなった時機を見て再び与えたのであった。掻画がなめらかなぬたくり画に変化してゆくのを祖母はそれとなく見守って、順調らしい発達を内心喜んでいた。ところが壁にはった包装紙に描いていたぬたくり画が、描かれなくなったことに気付いたある日曜日、父親とHがう

たいながら何か描いている。時々父親が歌の文句につまると、母親が台所からとび出してきて口を添えている。うたうにつれてかえるが描け、猫ができ、はてはコックさんが描き上がる。この方法をかなりやったらしく、時々うたうよりも手の方が先行している。〝うたと一緒にこんなものばかり描かせてはだめ。この絵は死んでいる。壁の包装紙に描いたのは、ぬたくりでも生きている〟と祖母は強く反対した。

〝喜んで描いているのだからいいじゃありませんか〟父親は子どもが喜びさえすればいいと考えている。〝だめだめ。思う存分にぬたくりをさせなきゃ。おとなの模倣をさせて何になる？〟〝模倣？　子どもというものは模倣からはいって経験をひろげてゆくものでしょうが〟と父親は珍しく反撃してきた。

〝おばあ様はそういうけれど、才能開発だの、英才教育だのって毎日のようにテレビ番組は迫ってくるし、私たち母親は迷うばかりです〟と母親は涙声になる。説得力のない祖母は口をつぐんでしまったが、大いに心にひっかかる問題であった。幸せなことにそれから間もなくNHKTVで子どもの絵をとり上げ、久保貞次郎先生を登場させ、描画方法の賛否を答えられる番組があった。

久保先生　〝子どもの絵に技法が先にはいってはだめです。子どもの心がはいっていない絵、そんな絵は子どもに描かせたくない〟

この久保先生の力強い言葉をきいて、同じことをいっている祖母の言葉には反撥していた父親も〝うう―〟とうなずき、即刻、うたにつれて描く絵は姿を消した。あとになって、Hが集団生活にはいり、そこの指導者である木下繁先生からも〝子どもの絵を指導する時、この辺をこうしなさいとか、うさぎの耳はもう少し長いとか、手をとって教えたりすることは非常にやさしいことで、現在でもそのような美術教育が世の中のほとんど大部分をしめているが、それは子どもの絵に対するほんとうの指導ではない〟と説明され、両親の、子どもの絵に対する構えは確かなものになったが、肝心のHには長く尾を引く問題として残った。

それはHが絵というものを描かなくなってしまったことである。一度、物の形が描かれるという甘味を覚えてしまった彼は、ぬたくりでは満足できなくなり、かといって自力では物の形を表現するにいたらず、そのジレンマが彼にクレヨンを見捨てさせたのであろう。せん方なく祖母は市

販の紙粘土を買い与えた。これにはとびついて、これパン、これりんご、ねこだよ、犬だよ、ミキサー車だよ、といえるだけの言葉をいって粘土をまるめたりたたいたりしていた。しかし、その喜びも長続きはしなかった。市販の紙粘土は必要な柔軟性をすぐに失う欠点があった。二、三日もたつとポロポロとこぼれ落ち、きれい好きな母親はまゆをひそめたし、Hも感触の快さを味わえなくなった。祖母は紙とふのりで作る柔らかい紙粘土を頭で描きながら、自分の生活の忙しさにかまけ〝つくってあげるからね〟という口先だけの紙粘土で日がたっていった。

積木との出会い

そんなころ、父親がコルクの積木を買い与えた。包の中からコルクの積木が出てきた時、その色調からであろうか、初めは手を出さなかったが、父親が積んでみせ、五個六個積みあげてバランスがとれず、カタカタとくずれると声をたてて笑った。何度も何度もその繰り返しをやり、ついに、買い与えた父親の方がいかめしい顔つきになって〝明日にしなさい〟と無理無理寝室へひっぱって行った。(この積木は四歳になった今もなお、Hのよき友だちである)

やがて、積木の倒れる瞬間とか倒れる音とかを喜ぶよりも、積極的に積み上げてゆく方に関心が移行し、背丈よりも高く積み上げるのが得意になり、背が届かないと、自分の椅子を持ち出してその上に乗り、積木を持つ指先に全身の注意力を集めて息をころし、ひとつ、またひとつ積み上げてゆく、そばで見ているおとなの方が肩のこる思いである。四歳の今は、高速道路をつくり、ミニカーと取り合せてあきぬ遊びを展開している。

ちなみにこのコルクの積木の長所と短所をあげるなら、長所は1、危険性のないこと、　2、大形の方なら二歳から四歳ぐらいの家庭用積木として大きさが適当であること、　3、円形のあること等

短所としては、1、コルクの色そのものが快適でないこと　2、木の積木の触れ合うと出るあの快い音、また快い触感のないことであろう。

三歳の旺盛な試行

Hの最初にいった二語文の中で〝よしてくれ、よしてくれ〟というのがある。うちのおとな三人のいわない言葉なので不審に思っていると、ある日指先に包帯をしているの

で、〝どうしたの〟とたずねると〝よしてくれ、よしてくれしたの〟ということで、この語源が八百屋のおじさんであることが分かった。毎日母親と一緒に八百屋へ買物に行き、店頭でいたずらをするので〝よしてくれ、よしてくれ〟といわれ、その日は竹の子のかごに手を入れて指先にとげをさしたのである。時にはまた、水に浸したぜんまいをとりあげて〝みみずぅ―〟と同じ年ごろの女の子をいやがらせることもあるという。この八百屋のおじさんは口でこそ〝よしてくれ〟というけれど大のHびいきでHが母親の実家へ旅行して十日ほど留守の時、〝寂しいね〟といってHの帰宅を待ちわびたほどである。

家中の引出しという引出しはひっくり返して中味を探索するし、本だなの上だろうがピアノの上だろうが、登ろうと思いついたら、何とか工夫して登ってゆく。さすがに降りることはできず、本だなの上で悲鳴をあげている。一度は父親が置き忘れたはしごをつたい登りしてゆき、藤だなの上で声がした時は、おとなたちは肝を冷やした。ひメダカを二十匹ほど水盤に放しておくと、たちまちその中に手を入れ〝いらっしゃい、いらっしゃい！〟と威勢のよい声を張りあげてメダカ屋になっている。

〝私が太れないのは、Hのいたずらがはげしすぎるからです〟と母親はよく祖母にこぼすが、祖母もまた、大きな被害者なのである。確かに置いたと思うものがそこになく、本だなの本は毎日のように放り出され、置時計は勝手に指針がまわされている。疲労して帰宅した日など、さすがにこの惨状にたまりかねてドアにかぎをかけることにした。しかしドアの外で泣き叫ぶ声をきけばへやの中にいても心は落付かない。冷厳と構えていると、ドアの外でも泣く手はやめてからめ手で攻めてくる。

〝ぼくも勉強するの。会社のお仕事がおくれるから〟（父親はこの手で撃退している）

〝新聞屋です。お金、とりにきました〟

〝荷物、持ってきました。はんこください〟

ついに、ドアをあける仕儀になってしまって祖母の仕事ははかどらない。

友だちを求めて

Hが急にいなくなり、家の中はもちろん、四つ辻の方までさがし歩いても姿はなく、母親は蒼白になり、警察への電話の受話器を取ろうとして、ハッと思いあたり、向いの

お家にうかがってみるとHがあがり込んで、一歳三ヵ月の女の子を相手に遊んでいる。胸をなでおろしたものの、どんな方法で門のさくをのりこえたのかふにおちない。形ばかりの門ながら、Hがひとりで出られないように、父親がさくをつくりそのさくに足掛りのないように工夫もしたはずである。遊び友だちを求めて、このさくをのりこえたのであろう。一歳三ヵ月の女の子と遊ぶために。家の周囲は小学生も高学年のお子ばかりなので、これ以来、さくは取り除き、おとなたちは真剣にHを三歳保育の集団生活にいれようと、その集団の場を、あれこれと選択した。

認識や感覚の大人とのずれ

動物園のチンパンジーを見た時〝大きなおさるさん、おとなのくせにはだしでいやねえ〟といった。おとなの感覚では動物のはだしなどというものはとらえられない。水田蔵相のクローズアップの顔をテレビで見た時〝あのおじさんウルトラセブン?〟ときいた。祖母は何のことやらわからず返事をにごした。念のためあとでウルトラセブンを見てやっとHの質問が了解できた。額に見事に大きいほくろのあることが二者同一であった。

祖母が幼稚園で飼育する小うさぎをアメヤ横丁に買いに行き、幼稚園へ引き返すのもおっくうになったので、てのひらにのるほど小さい二匹のうさぎをかかえて家に帰り、そっとHに見せると、歓声をあげてとびあがり、抱かせて抱かせてとせがむので、抱かせると緊張し、宝物をかかえたようにして放さない。ようやくなだめて箱に入れさせてもすぐ抱きに行って、とうとううれしさのあまり興奮して眠らず、おとなたちは困りはてた。

翌朝、Hが目覚めないうちに祖母はうさぎを包んで駅に急いだものである。それの罪ほろぼしに母親と祖母とでHを動物園へ連れて行った。あいにくこども動物園のうさぎは、この日は小屋から出されていず、小屋のうさぎを眺める形になってしまった。〝うさぎちゃん!〟と呼びかけてはいるが先日のアメ横のうさぎにもった執着も喜びも示さない。祖母はハッと気付いた。てのひらに入れて抱いたあの小うさぎはその暖かみを通して、彼の実感として確かにとらえられ、今、金網ごしに眺めるうさぎと同一視させようとするおとなの思慮の足りなさを。結局、おさるの電車に乗って喜んで帰ってきた。

また、電車、バスごっこに夢中になって、洗濯機の排水

ホース電気器具のコード、およそ長いコードにさし込み器具のついたものを見れば、口にあてて、しゃがれ声を出して、車内アナウンスをし、次は改札係も兼任するので必然的に切符をほしがった。勤め帰りの祖母は、改札を出てから自動販売機でわざわざ三〇円の切符を購入して、Hに渡したことがある。この時、喜ぶと思いのほか、けげんな顔をして〝どうしたのおばあちゃん、車掌さんに、せがとどかなかったから渡さなかったの？〟と不審そう。倉橋先生の著作集の中にある――〝飛びついてきた子ども〟時はさっきのあの時であったのである――が思い起こされ、我が孫ですら……と祖母はおとなのいたらなさを恥じ入った。

集団へ順応してゆくプロセス

Hの集団生活への第一歩は、母親のスカートをしっかり握って離さず泣きわめいた。そこでは第一日目から、完全に母親から離し、自立させることを目標としているので、午後三時半になって母親が迎えに行った時は、泣き声はもう立てないでいたけれど、目をまっ赤に泣きはらしていたという。外向的だとばかり思っていたHも、おとなの中に育った弊をそのまま多分にもっていることをあらためて知らされた。集団生活にはいる前に、いわゆる基本的な習慣の自立はできていたつもりであるが、内面的な自己確立は、なおざりであったことを反省した。この集団は週に一日だけ出席する規約であるので、五月になってもまだ集団に溶けこめなかった。今まで、さらさら興味も関心もなかった曜日のことを気にし始め、〝明日、何曜日？〟と毎日のようにたずね、〝ぼく、金曜日、おなかが痛くなって熱がでるんだ〟といいくらしたが、母親は彼の出席日の金曜日には強引にひっぱっていった。

祖母は常に受入れる側の人間であるので、この孫の不順応ぶりにあきれながらも興味をもった。ある金曜日の朝、Hは祖母のところへきて〝おばあちゃん、喜んで幼稚園へ行くの〟とたずねた。〝喜んで行くとも。毎日、元気でね〟といい放つと、取り付く島もないといった悲しい表情になって〝ぼく、だめな子なの〟とうなだれる。祖母は自分の心ない言葉に恥じ入った。父も母も励ましの一手であるゆえ、せめて祖母だけでもと思ってきたHに対し祖母は裏切りの言葉を放ってしまった。〝おばあちゃんもね。幼稚園に行った小さい時は、泣いたこともあるのよ〟となぜいってやらなかったのであろう。せめてものことにしっかりとH

の手を握って駅までの道を同行し、折りから来た急行にとび乗った。窓からホームを眺めたら、母親のそばに、はかなげな顔をして立っていた。Hは各駅止りに乗り次の駅で下車するのである。ほどなく、集団の場から垣根をこえて脱走し、十字路まできて右か左かわからず泣いていたところを見付けられ連れ戻されるということもあり、手数のかかる問題児だと母親は嘆いた。

入園記念の写真ができ上がってきた。それを見せながら、〃これは○○ちゃん、この子のしるしはペンギン、これは○ちゃん、この子のしるしは象さん〃といった具合に、クラスの子のほとんどの名とマークを説明した。泣いているというのにどうして覚えたのであろうか。不思議に思うと同時に〃この子には脈がある。じきに集団にもなれることだろう。問題児などではない〃と祖母は曙光を見いだした。

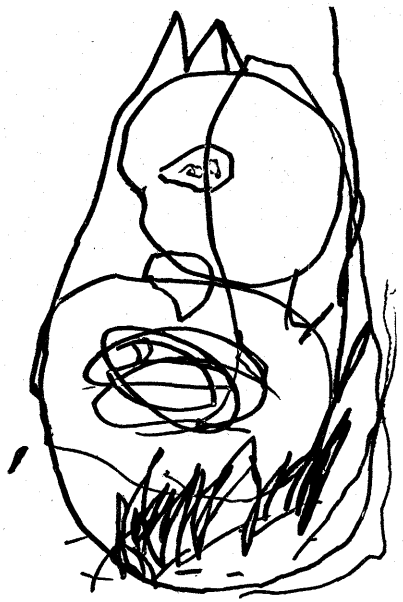
六月も近いころ、昼寝を長くしたから眠れないといって、Hは夜、祖母のへやへ遊びにきた。しばらく遊んでいるうちに、フト時計に目をつけ、三時半だといって立ち上がった。(実際は八時半)自分のいすを持ち込んで、通園時の帽子をかぶりかばんをかけていすにチョコンと腰かけた。〃おばあちゃん！　○○さん、さようなら、○○さん、さようなら、といってよ〃と五、六名、友だちの名をいうので、祖母はおうむ返しにその通りにすると、〃今度は、K・Hさん、さようならといって〃とわが名をいう。祖母はとっさに、園の降園の場を再演しているのだと気付いたので、母親をへやのドアのところまで迎えにこさせた。Hは喜んで、もう一度とせがみ、今度は父親が彼の気に入りの雨傘と長靴とを持って迎えに来たので、更に喜んだ。

このことによって、Hが集団に溶けこんだことを、祖母は、母親よりも先に知り得た。

心の奥深く育ちゆくもの

このころ、描いた絵に時計がある。彼が時間というものを知ったのは、三時半である。誰に教わったのでもない、彼自身の電波がとらえたのである。集団になれないころ、どんな思いで三時半を待ったことであろうか。とにかく彼は人生の最初の困難を克服したのである。四つ切の画用紙にポスターカラーで色とりどりの丸を描いた絵、これは心の安定を得た時描いたもので、黒い小さな丸がポツンポツンと描き添えてある。お花畑にしいたけがなっているの、と彼がその絵についての言葉である。しいたけは彼の好物

時　計



猫といってかいた絵

である。同じころに大好きなねこの絵も描いている。表現は稚拙ながら心の奥で描いているのが理解できる絵である。どれも、同年齢の子の描いたものとくらべて、そう遜色がないように思われる。してみると、Hは表現としての絵は久しく描かなかったけれど、心の中で描く絵のイメージはふくらませていたのではないか。Hが集団に順応してゆくプロセスを考えてみる時、子どもの表面にあらわれる言動が、その子のすべてではないということを知った。

祖母にとって、保育の道は、遠い雪みちのようである。踏みしめ踏みかため、遅々としてでも前進してゆかねばならない。またしても、倉橋先生に御登場を願って。

こころもち

子どもは心もちに生きている。その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れて呉れる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である。

子どもの心もちは、極めてかすかに、極めて短い。濃い心もち、久しい心もちは、誰でも見落とさない。かすかにして短かき心もちを見落とさない人だけが、子どもと供にいる人である。

（東京家政大学附属幼稚園）

交差保育法の実践（その一）

宮沢キヨ子・大塚朝子
佐藤佳代子・相楽幸子
指導　大戸　美也子

「交差保育法、こう呼ぶのにふさわしい教育（保育）の方法が保育界で開発され展開していくようにしたい」という呼びかけが、日本保育学会会報（昭和四十三年五月）を通して報じられたのは、四年前のことである。提唱者である松村康平氏は、交差保育法という呼び名は新しく、内容も一般的にゆきわたっていなくても、この保育方法と関連の深い保育はどの国でも実施されている事実を、次のように指摘している。

「集団内の個人に焦点をあてて、個人ひとりひとりを単位としてとらえ個人相互の関係を生かす保育がすすめられている場合」「集団内活動に視点を移して、いくつかの下位集団を領域としてとらえ、下位集団相互の関係を生かす保育が進められている場合」「組分けがどの組にとっても意義あるものとなるように、組相互の関係を生かす保育が進められている場合」あるいは「園と園とが、連絡をとりあって保育をすすめ連絡保育から、〝交換保育〟に発展していく場合」これらはすべて交差保育法が実践されていることになる、というのである。交差保育法は、交差活動の発展をもたらす「単位」（領域）をどのように規定し、どのような単位と交差させるかによって、そのレベルも発展の条件も異なってくるが、交差する領域相互が対等に関係しあい、領域相互の「差」が関係の発展に寄与するものとらえる保育の方法である。

交差保育法の応用範囲は広い。私どもの保育実践を高める研究会では、昨年の五月より交差保育法について考え、話し合い、いくつかの実践をかさねてきた。すなわち、クラス内での子ど

もの動き、小グループの動きを、交差の観点からとらえること、またクラス相互が連絡しあい、二クラス、三クラスが出合って共通の活動を展開できる幼稚園では、共通領域を発展させる教師のチーム・ワークのあり方が研究され実践されてきた。そして、秋には、研究会のメンバーが連絡をとりあって、園相互の交差保育を実現することになったようである。その実現までのプロセスを経過を追ってこれから紹介してみよう

一　交差保育実現まで

背景　郡山市は、昭和四十一年、近隣の町村を合併して、新産都市に指定された東北の中都市である。交差保育に参加したザベリオ幼稚園は、旧市内の中心部にある三十余年の歴史をもつカソリック系の幼稚園である。ここの園児は、旧市内の商店街の子どもを中心に市内の各方部から集まってきている。もう一つの富田幼稚園は、旧市内と新市内の境界地に位置し、なだらかな丘陵と平地が交差する林の中にある近郊の幼稚園である。

この辺は、バスに二十分ものれば市街地に行けるので、近年、丘陵部に団地ができたり、林が切断されて宅地として造成されている。しかし、平地では米作が行なわれており、市内とはいえのどかな田園風景がのぞまれる。したがって、ここの園児は、団地と農家から半々の割合でかよってきている。ザベリオ幼稚園は、市街地にあるため、園庭は平たんであり自然が豊かというわけにはいかない。一方、富田幼稚園は、園自体が丘陵の斜面を活用して建てられているため、園庭全体がなだらかなスロープをなし、斜面には背の低い松がいくつかかたまりをつくって植えこまれ固定遊具がその中に点在している。太い道、細い道、急な坂、なだらかな坂、そして日なたのところも、子どもたちが〝緑のトンネル〟と呼んでいる日かげの坂道もある。そしてまた、園庭のうらにはぶなや松の繁っている林がある。林を通りぬけるとあだたら山の全貌が眼前に広がり、山のすそ野まで田んぼがつづく。そして、田んぼの中に磐越東線の線路も走っている。

秋になると林に囲まれた富田幼稚園はさながら黄金の海に浮かぶ緑の島のようになる。そして、この林の中には、子どもたちが毎日毎日拾っても尽きぬほど、豊富に松ぼっくりやどんぐりの実が落ちてくる。林は無尽蔵の教材庫となるのである。こんな話を、市街地の先生が聞いて、子どもと共に一日をこの林の中で過ごしたくなるのは当然のことだろう。

十月上旬、研究会で顔を合わせる先生方の間で、市街地から郊外の幼稚園訪問の計画が練られ始めた。

実現への打診

十月八日（金）各園とも、研究会のメンバーを通して交差保育の実践について園長との交渉が始まる。富田幼稚園では園長はじめ、全職員が計画に賛同し園全体で受け入れることになる。一方、ザベリオ幼稚園では、交差保育のねらい、具体的に実践するときの方法について、同じく研究会のメンバーと主事との間で話し合われる。しかし、全園で交換するにはあまりに大所帯になること、一クラスが代表して交換する場合、クラスの選択方法や他のクラスの子ども父兄に対する配慮をどうするか等、主事から指摘があり初めての試みでもあるので園長と相談の上、実施の如何が決定されることになる。★1

十月十日（日）富田幼稚園、たんぽぽ組の担任（佐藤先生）はザベリオ幼稚園きく組、大塚朝子先生へ手紙を書く。

十月十六日（土）ザベリオ幼稚園園長より交差保育実践の許可がおりる。職員会議の席上で交差保育とその実践方法について大塚先生から全体に説明される。今回はきく組が代表で交換し、他のクラスの交換がさらに進められるようきっかけの役割を果たすことが話される。★2

十月十八日（月）富田・ザベリオ幼稚園双方が交差保育の実践を了解したところで、富田幼稚園の佐藤先生の手紙が投函される。

手紙の交換

十月二十日（水）佐藤先生の手紙がザベリオ幼稚園の大塚先生あてに届く。

◆ 手紙の内容

「とてもよいおてんきのひに、ようちえんのおともだちみんなで、やまへいきました。やまにいくと、ちょうどとっきゅうのとおるのがみえました。たんぽぽのあぜみちのくさにすわって、おべんとうをたべるとえんそくにきたみたいです。きいろになった　たんぽぽのなかをどんどんあるいていくと　どんぐりやまつぼっくりのたくさんおちているはやしにきます。そうそう、とみたようちえんのおにわにも、どんぐりのきがあるのよ。このあいだ、おとこのこが　そのきにのぼって　えだとえだのあいだにあしがはさまって　なかなかぬけない　ということがありました。ときどきそういうことがあるので、みんなはそのきを〝まほうのき〟とよんでいます。

とみたようちえんは、ちいさなおやまのうえにあります。おおつかせんせい　いちどきくぐみのおともだちとあそびにきませんか」（この手紙には〝まほうの木〟のさし絵もはい

っている。）

十月二十一日（木）ザベリオ幼稚園の大塚先生は、昨日きた佐藤先生の手紙を、子どもたちのどのような状態のときに入れるかを考えて、次のような保育を展開する。

（庭に落ちている木の葉を拾ってきて、へやを飾ったり、へやにまいて遊びながら秋の自然を子どもに感じてもらいたい。子どもたちが自発的に秋の自然について語りだしたとき、他の幼稚園のようすを知らせ、その幼稚園へ行ってみたいという気持が起こってきたらよいと思う。

八時半　ビンセン、鉛筆を準備しておく。

九時　外でお集り、お祈り、朝のあいさつ、庭には大きなかえでの葉がたくさんおちている。

先生「こんなきれいな木の葉が落ちている。一まい、二まい三まい　先生こんなに拾っちゃった」

子どもたちもまわりの木の葉に気づき一しょにひろい始める。「先生、こんな青い葉っぱが落ちてるよ」「わたしきいろい葉っぱだけひろっちゃった」子どもたちは口々にそういいながら次々葉っぱを集めていく。

先生「あら、たくさんあつめたわね。みんなのきれいな葉っぱで何ができるかしらね。じゃあ、おへやにはいって葉っぱであそびましょうか」

へやにはいると、子どもたちは床の上に葉っぱを並べたり数えたり、セロテープを使って飛行機や人形の着物などの製作を始める。子どもたちの活動がだんだん終りに近づいてきたころ、（一時間近く子どもは思い思いに葉っぱを使ってあそんだ）佐藤先生からの手紙をとり出して

先生「きょう、先生にこんな手紙がとどきました」子どもたちは活動の手を止めて、ハッとして先生の顔を見る。

先生「さあ、封筒の名前を見てみましょうか、これはね、さとうかよこ先生なの。富田幼稚園のたんぽぽ組の先生なの、どんなお手紙か読んでみましょうか」ゆっくりと、子どもたちに話しかけるように読む、興味をさそうような個所はくりかえし読む。

子どもたちは、好奇心をもってひとりひとり静かに聞いている。「まほうの木」「山の上の幼稚園」「特急が通る」という箇所で「へえー」「へえー」と反応し、「ほんとうに、まほうの木があるのかなあ」「どんぐりがたくさんおちているの」と驚いた表情で聞きかえす。子どもたちは、本当にそんな幼稚園があるのかなあ、行ってみたいなあ、という気持はあるようだが、「幼稚園に行こう」「木の実を拾いに行こう」という実行のことばは出てこ

ない、そこで、子どもたちの気持を引き立てるつもりで

先生「みんなこんなお山の上の幼稚園へ行ってみたいなあって思わない？」

子ども「うん、行きたい」「先生行こうよ」「行こう！行こう」

先生「行ったら、富田のおともだちとどんなことできるかしら？」

子ども「どんぐりたくさんひろうの」

先生「今ごろ、富田のおともだちは何しているかしら。みんなの気持を伝えるにはどうしたらいいかしら？」

子ども「手紙かくの」

先生「そうね、いい考えね。じゃあ、手紙書きたいおともだちは、ビンセンと鉛筆あげましょう」

全員が、便箋と鉛筆をもらって書き始める。「かよこせんせい、おげんきですか」と書き始める子どもが多い。口々に「さとうかよこせんせいだよね」と確認しているので、黒板に「さとうかよこせんせい、とみたようちえん、たんぽぽぐみ」と書いておく。字のわからないときは、先生が書いてあげることを話しておくが、友だち同志で教え合っている。あいさつのところまでは書いたが、その先の言葉がでてこないようす。

先生「みんなどんなことしてあそんでいるか、しらせてあげたら？」と、話しかけると、幼稚園での生活のこと、気づいたことを書き始める。十一時半より毎週おこなわれている英語の時間が始まるため、どんなことを手紙に書くか、ひとりひとり内容をたしかめ、また明日その続きをすることにして片付けを始める。

十月二十二日（金）（子どもたちの手紙にたいする反応がわかったので、富田幼稚園へ期待していること、考えていることが何らかの形であらわすことができるように、ひとりひとりの考えを認めてその先をのばすようにしたい。）

朝、子どもの方から「手紙のつづきかきたい」と意欲的にいい始めたので、すぐ昨日の続きにとりかかる。子どもたちは、書きたいことを一言一言友だちに話しながらエンピツを動かしている。

「早くいきたい」「どんぐりをひろいたい」「〇〇日にいきたい」「けんかはしないですか」「どんぐりがすくなくて、とりっこします」等々と書いている、もう書き終えた子に「もようを書いてあげたら、もっときれいな手紙ができるんじゃない」と助言する。〝きくぐみ〟という文字のまわりをもようで飾り、印象的にしたり、好きな絵を描いたり、幼稚園で遊んでいるようすを描く。

できあがった手紙は、大きな封筒に順々に入れていき、佐藤先生に渡すことを話す。

十月二十四日（日）佐藤・大塚先生が出合い、きく組の子どもたちがどんなようすで手紙を受けとめたか話す。きく組からのお便りと、ザベリオ学園のバザーで売られたビスケットが富田幼稚園の佐藤先生に手渡される。

十月二十五日（月）（たんぽぽ組の子どもたちに、どんないきさつでザベリオのお友だちから手紙がとどいたかを知らせるとき、町から訪ねてくる子どもたちの喜びや期待と同じくらい強い期待を育てるにはどうすればよいかを考え、裏山へ行ってビスケットを食べながら大塚先生の手紙を読むことにする）

八時半　キリン紙、鉛筆を用意しておく、

九時　月曜日なので、全体が集まって昨日あったことを発表する。お父さんの車にのってお母さんとお姉さんと三人で歯医者に行ったこと。お兄ちゃんと家で積木や粘土をしてあそんだこと。おじいさんの家にあそびに行ったこと。ドライブに行ったこと等が話される。

先生「他にいませんか？

じゃあ、先生もきのうのことみんなにお話しします。きのう、先生はお友だちにあいました。そのお友だちの名前はザベリオ幼稚園の先生なのよ、大塚朝子先生といいます。どうして大塚先生に会ったかというとね、先生が大塚先生にお手紙書いたからなの。ほら、いつかとってもお天気のいい日に、すみれさんもれんげさんも、たんぽぽさんも一緒に山へ行ったでしょう？そして、特急電車や貨物列車を見てお弁当食べたでしょう。あのときのこと、とっても楽しかったから手紙にして出したのよ。そうしたらね。大塚先生から電話がかかってきたの『ザベリオのきく組のおともだちがたんぽぽさんに手紙を書きましたから、とりにきてください』って。ザベリオのおともだちは、富田幼稚園へあそびに来て、どんぐりや木の実を拾いたいんですって」

子どもたちは、始めて聞く先生の名前だったり、事件なのでポカンとしてきいている。ザベリオという名を聞いて「町の幼稚園だね」「近くの〇〇君がいってたよ」等と話す。

先生「ねえ、どんぐり、どこにたくさん落ちているかしら？どんなところにどんぐりが落ちているか見に行きましょう」

（どんぐり拾いに行くというので、子どもたちの顔がパッと明るくなる）

先生「それからビスケットもいただいてきたの。少しずつだけど食べながら朝子生先からのお手紙よみましょう」ビスケット、と聞いただけでますますうれしそうに立ちあがって外にと

び出す。先生は手紙とビスケット、それにビニールの袋を持って裏山へ向かう。

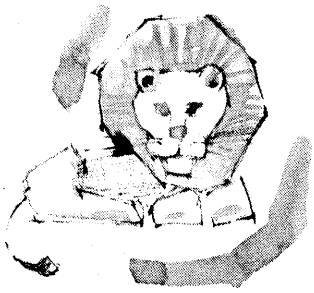
解説

園と園との連絡がとれ、交差保育の第一歩がふみ出されたところである。これまでの経過でよく吟味したいことは、**第一**にそれぞれの幼稚園で交差保育の位置づけをはっきりさせること、**第二**に交差活動の単位の規模と、それに規定される発展の条件をとらえること、（役割期待）そして**第三**に、連絡の媒介物の生かし方を意識的にとらえることの三点である。第一については園長の協力を得て、全職員で話し合うことが大切である。結果的には特定のクラスが代表して交換することがあっても、活動を共有できる状況があってはじめて園と園との交差保育なのである、ということが認識され実践される。★2第二について今回は、一方の園が六クラス二百余名（他方の園は三クラス七十名）の大規模な園であるため、園を代表する一クラスと全園との交換という形となった。★1したがって、きく、たんぽぽ組共に、交差活動をになう一方の単位としてふるまう役割の他に、二つの園をつなぐ役割（接在的役割）が同時に期待されていた。園相互の関係が同時にすすめられる場合、またクラスのみの相互関係が展開される場合には、それぞれに期待のにない方が異なることに注意する必要がある。第三の課題について今回は、手紙が有効に生かされ、製作等の物の交換への布石が上手にひかれていったと思われる。（郡山女子大学、ザベリオ幼稚園、富田幼稚園）

――日本保育学会第二十五回大会のお知らせ――

一、大会期日　昭和四十七年五月十三日（土）十四日（日）
二、大会会場　大阪樟蔭女子大学（近畿日本鉄道奈良線、小阪駅下車、徒歩約三分）
三、おもな計画案
　1、創立二十五周年記念講演会　　山下俊郎会長
　2、個別研究発表
　3、シンポジウム
　　テーマ「これからの幼児の保育は、どうあるべきか」
　　――中教審および中児審の答申をめぐって――
　　第一日　保育の制度を中心として
　　第二日　保育の内容と方法を中心として
　4、資料展示会　テーマ「世界の幼児保育」
四、大会参加費
　正会員　　七百円
　臨時会員（正会員でない方）　七百円
　学生　　二百円
　日本保育学会の正会員でない方も、臨時会員としてご参加いただけます。
　　大会当日、受付へご持参願います。
五、連絡先
　東大阪市菱屋西二五八
　大阪樟蔭女子大学児童学研究室内
　電話（〇六）七二三〜八一八一
　　八一八五内線四六
　日本保育学会第二十五回大会運営委員会

こんな本あんな本



小島直美

本をご紹介するにはあまりに不勉強な自分にあらためて恥じ入りながら、久々に本屋さんによってみました。行ってみて、子どもの本のコーナーが広がったこと、そしてその中の大きな部分に、色鮮かな〝とび出す絵本〟だのまんがに近いものなどの目立つ本が、いっぱいあるのにびっくりしてしまいました。「ぼくね、仮面ライダーの本もってるよ」「ぼくだって！」と男の子たちが話しあっている本なんだな、と思いながら、そしてテレビによってウルトラマンだのスペクトルマンだの仮面ライダーだの、今度はミラーマン、とどんどん新しい興味を作り出され、本もそれを追って新しいものが出て、こんな中でよくいわれることながら、本当に良い本を与えるということはむずかしいことなんだな、と痛切に感じてきました。

そんなことを考えながらその場に立ちどまってしまった私が手にしたのは、ちょっと変わった絵本でした。「ふなひき太良（たあら）」（儀間比呂志　作・絵）という沖縄の絵本なんです。といっても、沖縄の民話でなく創作のようです。

飢饉の時に拾われた赤ん坊が「太良」と名付けられて、とても大きく育ったのですがちっとも働かず寝てばかりいるのです。そして、ある時台風に襲われて食べ物もなくなったのに薩摩の役人が年貢をとりたてに来ました。困った村人からわけを聞いて太良は海にはいって役人の船をひっぱって陸にあげるんです。生命（いのち）の力をふりしぼって船をひきあげると太良は力つきて大きな音を響かせて丘に倒れ岩となってしまうのです。沖縄のもつ苦しい悲しい歴

史を感じさせ、その中で祈るように願っている神の力のようなものの出現が、力強いだけにより悲しさを感じさせるような本です。たくましすぎて迫力がありすぎて、だから悲しい沖縄の心がジーンと感じられる本です。

「あぬやぁ、むかし　むかしの　はなしやしが。おきなわの　みなみの村に　がし、(ききん) があってね。」と語り出され、太良が船をひきはじめると「いかりづなを　つかんだ太良は、かおをまっかっかにして、ふねを　ひきはじめたわけよ。あれだけの　ずうたいで　ひっぱるから、ふねは　すこしずつ　うごきだしてねえ。……よいしよいし　よいし　よいし　ふねは　ひとひきごとに、はまにちかづいてくるのさ。」と静かに語り続けられます。そして、版画にあっさりと色づけられた絵が、何よりもその力を感じさせてくれるのです。おとなも楽しめる絵本です。むしろおとな向きな気もします。でも、年長組の子どもたちぐらいにはせめてこの沖縄という島のかなしい民話のふんい気を感じさせたい気もします。絵本っていろいろな読み方があると思います。いろいろな与え方があります。この絵本なんかはどんなふうに読んであげたら、見せてあげたらいいか、なんだかむずかしい気がしています。

幼稚園で私は時々絵本を読んであげます。太良の本のご紹介をさせていただきたくなりました。

夏休みのあと、「機関車に乗ったんだよ」と得意げに話している男の子がいました。その数日後、バートンの「いたずらきかんしゃ　ちゅうちゅう」を読んであげました。十人ぐらいの男の子たちは、どんどんお話に引きこまれていきます。いたずらな機関車のちゅうちゅうがひとりで逃げだして、駅を通過し、踏切で自動車を急停車させ、あいているはねばしをとびこえ、それでもひとりで走っていきます。もう止まれないんです。そして二つにわかれている線路にさしかかってどちらにいくか迷っている時、他の場所で遊んでいた子どもの用でその場を立たなければならなくなり、少しいじわるに「このつづきはもう少しあとのオタノシミ！」と本も持って行きました。

ところが、ふだんならもう散っちゃいそうなそのグループがちゃんと待っていたのです。それも「ちゅうちゅうはどうしただろう」と話しながら。

十一月には幼稚園でうさぎの赤ちゃんが生まれました。その親うさぎたち

が来たころ「しろいうさぎとくろいうさぎ」（ガース・ウィリアムズ）を読んだ子どもたちが、うさぎのほのぼのとした愛をそれぞれの心に残していたのでしょう。オメデタのニュースに「パパとママになるんだね」「よかったね」と本当にうれしそうに話していました。自分たちのうさぎへの気持に〝うさぎ同士の愛〟がはねかえっているような子どもたちのようすでした。

「はずかしがりやのぞう」（つかさおさむ）というお話がありました。恥ずかしがりやのぞうの子が、恥ずかしいと思ったり、コンプレックスを感じたりするたびにからだまでがよけい小さく縮んだりするのです。けれども、きれいな花のにおいを、鼻を思いきりのばして吸いこんだり、その鼻で水あびをしているところを他の動物にほめられたりして、だんだんに勇気を得るお話です。やわらかなデッサンタッチの絵に淡い美しい色がついています。ぞうの子の気持がとてもよく絵にあらわれているのです。この本を恥ずかしがりやの女の子が気に入りました。時々お友だちからはなれてひとりになると、その本を開いてじっと見つめている姿が何回か見られました。

三歳の組の時、ちょうどもうすぐ春という時、「はなをくんくん」（ルース・クラウス　文　マーク・サイモント　絵）をおへやで読んであげました。いろいろな動物の眠りと目覚めと動きのくりかえしが楽しいらしく、そしてみんなが一点に向かって走っていく動きが子どもたちの心の動きを上手に誘って、〝ゆきのなかに　おはなが　ひとつ　さいてるぞ！〟というラストの動物たちの喜びの表情が子どもたちの顔にもあらわれていました。

この子に、今、どんな本を与えたらいいか、それによって本が生き、その子の友だちにもなり得るのです。絵本が本当に子どもの心の中に生きるような与え方をしたいと思います。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

幼児と美術
―デザインから幼児へのアプローチ―

磯貝芳郎

幼児と美術という言葉からふつう連想されるのは、幼児の美術作品の鑑賞とか、幼児の造形活動とかいうことだろう。それはいずれも大事なことだし、そのことについて書くのには、もっと適当な人がいるだろうと思う。そこで私の場合は幼児からの美術へのかかわりではなくて、逆に美術から幼児へのかかわり方について書いてみたい。

もっともここで美術といっているのは、いわゆる純粋美術ではない。絵画や彫刻のことではなくて、広い意味で美術にふくまれるデザインからの幼児へのかかわりである。外国のデザイン雑誌には、子どものためのデザインがしばしば紹介されているのが目にはいるけれども、そしてすばらしいと思われるものがあるのだけれども、わが国ではほとんどそういうものがない。

しかし全くないというわけではなく、子どものための玩具デザインに専念している人もいるし、遊具の開発に熱心なグループもあれば、児童公園の設計に努力している人もいる。だが総じてあまり目立たないし、それを高く評価されるということもないようである。別に目立ったり評価されなくてもかまわないのだけれども、おとなの生活の繁栄のかげにかくれて、幼児の生活や、そのためのデザインがおしつぶされてしまうのは残念である。

何かというと〝子どものため〟といいながら、電動式の高級玩具ばかりが作られたり、いわゆる教育玩具になってしまったり、これはちょうど〝消費は美徳なり〟とか〝消費者は王様〟などといって、実は企業の系列下に消費者をかかえこんでしまうのと同じように思われる。そこにあるのは実はおとなの利害ばかりで、子どもはそのなかにまきこまれているにすぎない。

そこで私たちはコマーシャリズムと関係なしに、デザインの方から子どもへの働きかけを考えてみたのである。以下はその小さな試みの報告である。

幼児の生活の基本は遊びにある。ところが最近の子どもは遊ばないともいわれるし、遊び方を知らないともいわれる。おとなが幼児の生活から遊ぶ環境をうばいとってしまったからである。小手先だけの遊びではなく、全身運動を伴なった遊びの中で、自己表現の出来る子どもが、いちばん子どもらしい。そういう子どもが美術作品に接した時に、もっとも豊かな感受性をもち得るのではないかと思うのだが、それはともかくとして、幼児をして思い切り遊ばざるを得ないようなデザインは考えられないものだろうか、というのが私たちの最初の動機である。それに関連していくつかの問題点があがってくる。

第一には現代の子どもにとっての〝自然〟とは何だろうかということである。自然は自然であって、それ以外のなにものでもないというのは公式の回答である。子どもを自然のなかに帰すということは何よりも必要なことであろう。しかし都市化現象が急速に進行していく過程で、昔遊んだ野山や河原や原っぱを子どもに与えようとしてもしょせん無理な話である。そのことを繰り返していうだけでは古きよき時代をなつかしむおとなの郷愁に終わってしまうし、あえて行なおうとすればそれ自体が人工的になってしまう。

月にうさぎがいるというおとぎ話が通用しない現代の子どもにとって、〝自然〟に代る自然が何かあるのではないか。それは何だろう。これが私たちの第一の問題である。

第二の問題は生活＝遊びのなかで破壊する楽しみを味わえないだろうかということである。ふつう遊具・玩具といえば、大体遊び方がきまっているし、多くは組み立てる、つくりあげるものである。しかし幼児の場合にはもっとこわす面白さを考えてやる必要があるのではないか。ひとつのまとまったものを、こわしてこわして、こわしていったら別のものが出来ちゃったというものは作れないだろうか。

第三には幼児にできるだけ抵抗感を与えるものは何かという

ことである。幼児の行動を見ていると、困難さの多い方にわざわざ近づいていくことが多い。やってはいけないということほどやりたがる。危険に近づいていく。スベリ台はすべらないで逆にかけあがる。砂や石が積んであればその上へ登っていく。ところがいまの玩具は子どもに何の抵抗も与えない。見ているだけで玩具は自動的に動いてしまう。そうではなくて、子どもが何としてもどうにもならんという道具は作れないものだろうか。

第四には子どもの意図とは異なった反応をおこす。いってみれば意外性というようなことである。子どもの意のままにはならない。そうならないから面白いといったようなものが作れないかということである。

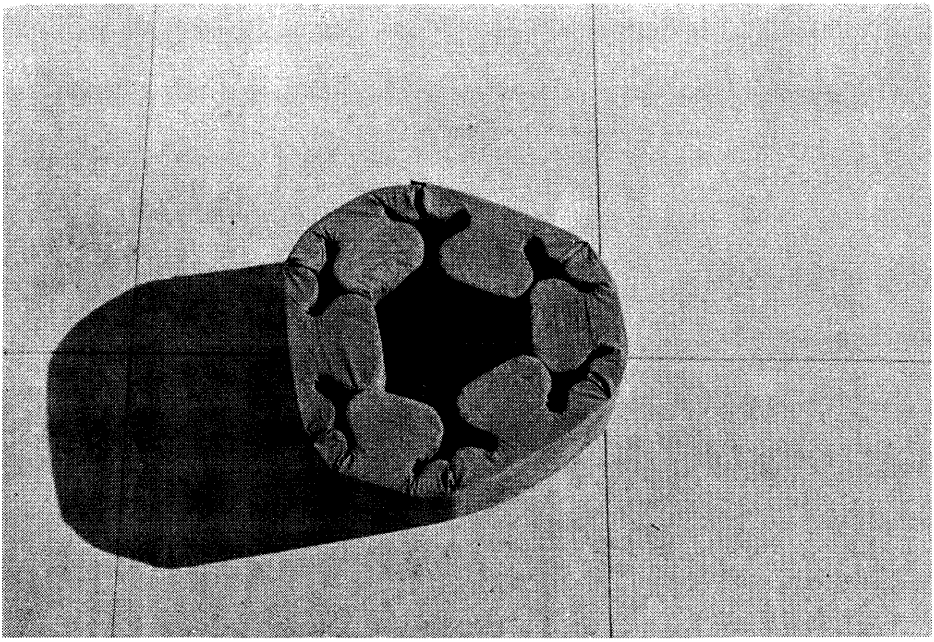
そして最後に当然のことだが、安全であって、子どもの集団生活を豊かにしていくものであってほしいという願いがある。

デザインというのはともするとデザイナーのセンスにたよりがちである。しかしながらこれからは、特定の個人の感性よりも——それが全く無視されては困るのだが——科学的な資料に基づいて緻密な計算がないとデザインとはいえないのだと思う。したがって私たちには遊具のデザイン活動を通して、科学性・客観性をもったデザインとは何かを追究してみようという意図があった。だから右にあげたような、幼児にとっての第二の自然、破壊の楽しみ、抵抗性、意外性、安全、集団形成というのも、幼児の遊びや行動の観察や調査をもとにして出てきたものである。その手続きや結果について、詳述する余裕はないけれども、ただ調査活動と具体的なデザインへの造形活動とはなかなか統一しにくいということは、ここで正直にいっておかなければならないだろう。だから私たちの作業も、はじめに考えた問題点を解決するというよりは、それとは大分へだたりのある〝ひとつのもの〟を作り出してしまったという結果になる。

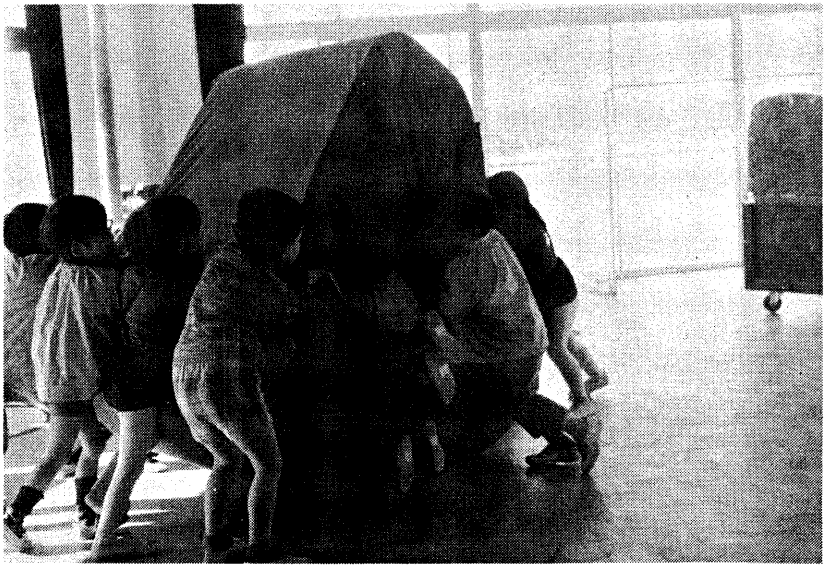
その結果を紹介してみよう。

原型は円である。実際には六角形なのだが材質に堅い部分と柔らかい部分とがあり、正六角形にならない。(写真1)だからこの上に子どもがのろうとすると、堅い所ではねかえされ、柔らかい部分ではそのまま沈んでしまう。このままの形で中の空間に子どもがはいると、十五、六人は楽にはいってしまう。

これをたてて、なかに子どもが腰かけるように並ぶと三人は楽である。そのままうまく反動をつけると、ころがることも出来る。ただし一人の力ではどうにもならない。(写真2)つなぎめをはずすと、ぐっと伸びてしまって長さは四メートル半に広



写　真　(1)



写　真　(2)

写　真　(3)

がる。その上を子どもが走りぬけようとしても、堅い部分と柔らかい部分があるので、思うようにはいかない。下に子どもがくぐっていて、その上を別の子がはねても、大丈夫である。(写真3) これを逆にひっくりかえしても遊べる。都合六通りの変化をする。

まとめてみると、破壊ということは生きていない。かろうじて六角形としてまとまっていたものが、長く伸びてしまうというところにみられるが、これは成功したとはいえない。抵抗性を与えるという点では、一人では動かせないとか、意のままに反応できないとかということでまずまずのところである。意外性の点では六通りの変化、硬軟の交錯でかなり出ている。安全性も高いし、もともと集団でないとどうにもならないものである。

デザインにはひとりよがりの出てくることが往々にしてある。この遊具（一応花の形をしているし、また大きくグロテスクでころがれるところから仮にフラワータンクと名づけた）も、子どもに敬遠されたのでは何にもならない。幼児がどううけとるかが、ひとりよがりをチェックしてくれる。

最初に幼稚園にもちこんだときは異常な興奮状態であったと

いってもいいだろう。その園の主任の方は、「こんなに子どもが興奮したのは初めてみた」といういいかたをされていた。子どもはからだごと、このフラワータンクにぶつかっていったのである。

初日は初めてのことなので別として、この興奮がどのくらい続くかが問題になる。翌日から学生に交替で観察に行ってもらったが、「うっかりさわろうものなら、子どもたちにどやされる」ほどよく遊んでいるということである。

まだこれから長期間にわたって観察を続けてみないと、結論は出せないけれども、およそ次のようなことはいえそうである。

①置き方に六通りの変化があるけれども、それをどう使うかは何も規定していない。だから遊び方のヴァリエーションはもっと多くなるだろうと思われる。

②全身運動のための遊具であり、集団用の遊具でもある。集団のメンバーが個々ばらばらに勝手な動きをしてもいいし、また協力して遊ぶこともできる。

③硬軟の材質のとりあわせで、触覚的にも楽しめる面がある。

④ジョイントに工夫を加えると、もっとばらばらにしてしまうこともできる。

⑤ユニット化すると、子ども部屋のインテリアとしての可能性もある。

これが私たちのデザインから子どもへのアプローチの試みのひとつである。まだ始まったばかりで、こんな形で書くほどのものではないのだが、幼児の遊具の世界は、いぜんとして、スベリ台、ブランコ、積木、三輪車といったものばかりで変化に乏しい。そこでこんなものでもあえて紹介してみて、ご意見や批判をいただきながら、次のアプローチにかかろうと思ったからである。

幼児の世界はデザイナーだけが一人でりきんでも、心理学者が実験をくりかえしても、なかなか豊かにはならないものである。両者が協力して、本当の意味での子どものためのデザインに努力していけば、現代の子どもにふさわしい、力にあふれた夢の世界が開けてくるのではないだろうか。

（武蔵野美術大学）

ユートピア

一ばんうれしいこと

河井祥子

幼稚園の片すみでおきた、小さな小さなできごとを、ご報告いたしましょう。

そこには、大きな大きな愛情が、つまっています。

もうそろそろ冬仕度をはじめるころの十一月十七日、ボクは生まれました。

おかあさんは、ボクたちが生まれても寒くないようにと、アゴの毛をぬいて、待っていてくれました。人間は、その中にワラを敷いてくれました。もういつ生まれても大丈夫。

おひる過ぎ、真暗な小屋の中で、十一匹のうさぎが生まれました。どんなうさぎですかって？　もちろん、おとうさんとおかあさんに似た、真白なうさぎです。

お隣りにいるおとうさんうさぎも、とても喜びました。時々、ボクたちにお話をしてくれます。また、遊んでくれる時だってあるのです。

けれど、もっともっと好きなのはおかあさん。いつもボクたちを守ってくれます。お乳も飲ませてくれます。寒くないようにと気をつけてもくれます。わかるでしょう。なにしろ十一匹の兄弟ですから。それでもボクは、おかあさんがイヤな顔をしたのを見たことがありません。

ボクが生まれて一ヵ月たちました。始めは何の子どもだか良く分からなかったようなボクたちも、今では一人前、耳だってこんなに長くなりました。うさぎとびだってできますよ。

ある日、外からこんな声が聞こえてきました。

「あら、一日一日大きくなるワ」

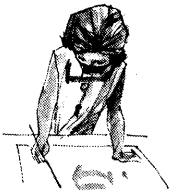
「そろそろお嫁入りさせなくてわネ」
なんてかなしいことでしょう。
すると、おかあさんうさぎは、困ったような顔をしてこんなことを言いました。
「まだまだそんな時期ではありませんの。これから、どんな物が食べられないか、また、お行儀良く食べることも教えてあげなくてはなりません。それに、兄弟仲良く遊べるようにならなくてはネ」
そうなんです。まだまだボクたちは、いろいろなことを、たくさん見たり、聞いたりしなくてはならないんです。
ボクがここから見ていると、人間も、たくさんのことを、おかあさんから教えてもらっています。時々あまり良く教えてもらわなかった人もいるようですけれど。
こんなこともありました。
ボクは、小さい小屋から、広いところへ連れていかれました。ボクたちも、あまり広いところでビックリしましたが、人間の子どもたちもビックリしたようです。きっとボクたちがあまりに小さかったからでしょう。そんな時でも、ボクたちの気持が分かってくれる子どももありますし、全然、そんなことを考えないで、自分だけさわりたがる子どももいます。こういうことも、きっとおかあさんから教えていただくことの一つでしょう。
ボクのおかあさんも、ボクが一人でどこかへもらわれていってもいいように、皆、教えてくれるのです。その時がきたら、この狭い小屋の中にいては知ることのできない世界へと、出ていくことになるでしょう。
ボクたち兄弟、それぞれ違う所、違う世界の中で生きていくでしょう。
ボクの名前？
ピョン太、ピョン吉、シロ助、ミミ夫……まだ決まっていないんです。誰かがつけてくれるでしょう。
決まっていることは、ただ一つ、ボクは、うさぎ、人間にはなれません。そして、人間はうさぎにはなれないということ。
もうすぐ、うさぎも一人前になるでしょう。そして、新しいうさぎが、また、おかあさんから愛を受けるべく、集まって来たではありませんか。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

幼児の人物画について(一)

―性別の表現―

青木　隆



子どもたちの描く人物画から多くの研究が生まれ、絵画による精神検査法もいろいろ開発されてきた。次にあげる二つはその代表的なものであろう。一つはグッドイナッフの人物画による知能検査であり、他はマッコーバーの人物画による性格診断法である。この両者はすでに桐原・大伴・扇田などの方々によって紹介され、一般的に使用されてもいるので、ここに改めてふれる必要もないと思う。マッコーバーの性格診断法は年少幼児より、むしろ学童以上に適用するのが有効であるように思われるが、グッドイナッフの人物画検査法は、逆に年齢が低い方により適切であるかのように見受ける。それゆえ幼児画の発達を研究する以上、この人物画法をさけて通ることができないだけの価値を十分にもっていると考えられる。私はここ二、三年来、ハリスがグッドイナッフの技法に手を加えて改定した人物検査法を中心として、他にベンダー・ゲシュタルト・テストの児童用診断法の研究者として知られるコピッツが開発した人物画診断法なども参考にしながら、あれこれと幼児の人物画の周辺をうろついてきた。しかししょせんはらちもない堂々巡りのくりかえしであったのだが、幼児の人物画はまことに興味深い課題を次々私に提供し続けてくれた。

そこでここに幼児の人物画にまつわる問題のいくつかをとりあげてみることにした。

男性像と女性像

ハリスがグッドイナッフの人物画検査法を改めた点はいくつ

かあるが、従来、男性像のみ描かせていたものを女性像・自画像を加えて合計三点の絵を描かせるように改めた。このように一度に描く作品の数を増し、課題に変化をもたせることによって、知的発達の測定の精度を高めたばかりでなく、他に多くの利点をもたらした。特に種々の性格診断の技法を同時に併用できる点が考慮されているのみでなく、たとえば自画像と他の画像との比較によって自己概念の成立過程を知る手がかりを得るなど、今後の展開に多くの可能性を含むものとなった。

実際に幼児の描いた作品を三点ずつ並べて見ると興味をそそられる問題が感じられ、たった一枚の男性像が物語る内容より、はるかに深度のふかいより多様な情報がくりひろげられているように思われる。

ハリスの人物画法における教示には、man・woman・yourself という言葉が使用されていたので、最初私は無雑作に「男の人」「女の人」といって作画させていた。ところができ上がってくる作品の多くは、man ではなくて boy であり、woman ではなく girl であった。「男の人」だけでは少年でも成人でもさしつかえないことになるが、子どもたちにとって描きやすい人間像は同年齢程度の画像であって、成人の画像を描くのはやや抵抗があるらしいことが分かってきた。特にことわらないかぎり、「男の人」とか「女の人」とかいうだけでは少年像を描き、少女像を描いてしまうのかもしれない。また、元来成人と子どもとの画像は描きわけにくいもので、彼らはおとなを描いたつもりでも私の目にはすべて少年や少女の像に見えてしまうのかもしれない。

このような混乱をのぞくために、それ以降の調査からは「男のおとなの人」「女のおとなの人」というように改め、幼児に対しては「お父さん」「お母さん」という言葉を付け加えることに統一した。(幼児に対してパパ、ママという教示方法はハリスに従っている)

このように改め集めた幼児の作品から、まず最初に受けた印象は、年少幼児にはおとな・子どもの区別はおろか、男性・女性の区別すら示されていないことであった。つまり三枚の画像の間には、ほとんど差異が認められないものが多かった。それでも年長クラスではなんとか男女の差が描きわけられているかのように見受けられた。しかしおとなと子どもの相異が判別できるように描きわけている作品はまことに少なかった。そのため男児にあっては男性像と自画像、女児の作品では女性像と自画像というように同性の画像の間に変化の見られないものが多かった。

(写真参照　写真は、左から男性像、女性像、自画像の順)

そこで第一にとりあげる問題点は、幼児の人物画に見られる

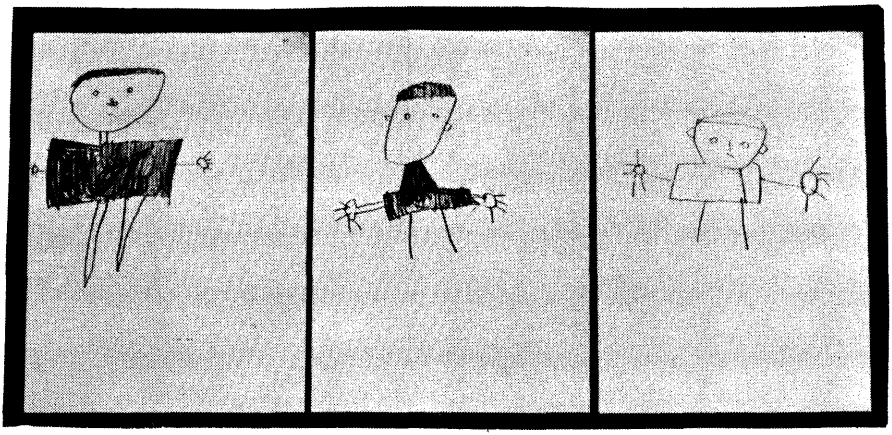


写真１　５歳10ヵ月男児　性別の表示は認められない

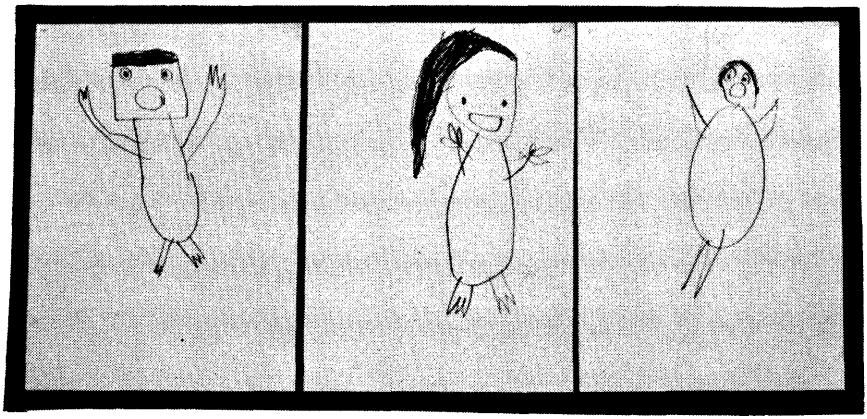


写真２　５歳10ヵ月男児　女性のみ毛髪を長く表わす

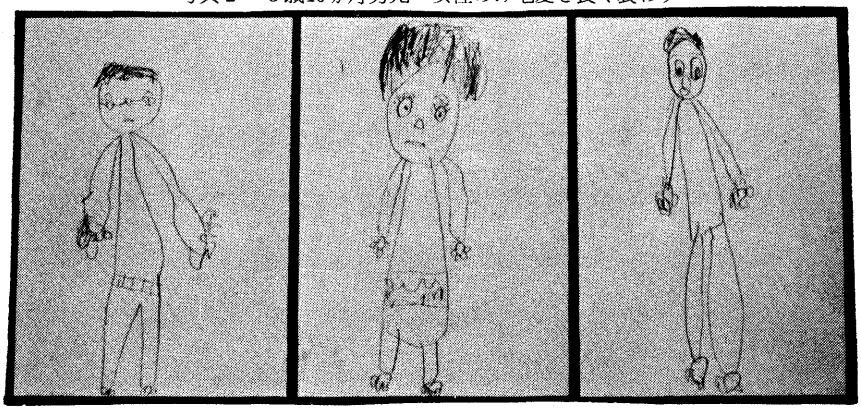


写真３　５歳男児　女性はワンピース、男性はメガネが描かれている

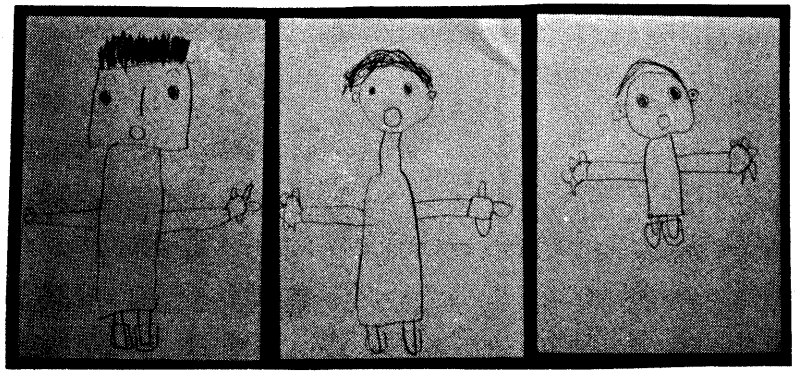


写真4　4歳5ヵ月女児　男性のみ毛髪の表現法がちがう

写真5　5歳8ヵ月女児　頭部では区別されていないが、ズボンとスカートによってかきわけている。女性にはペンダント、男性にはネクタイ

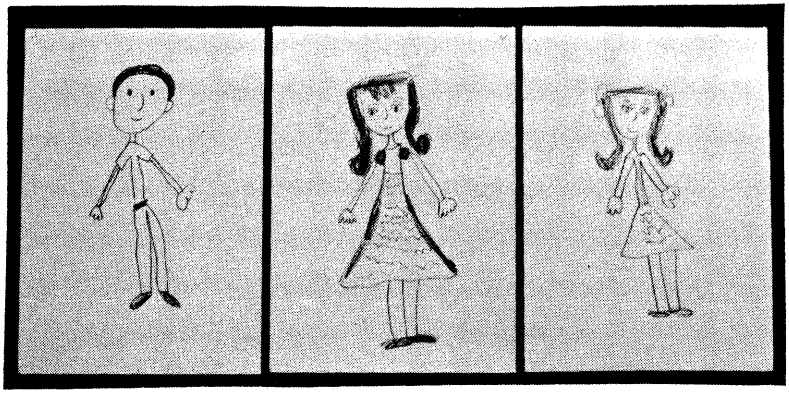


写真6　5歳9ヵ月女児　性別の描写はかなり進んでいる。髪形やリボンによって年齢差もやや認められるが、はっきりしていない

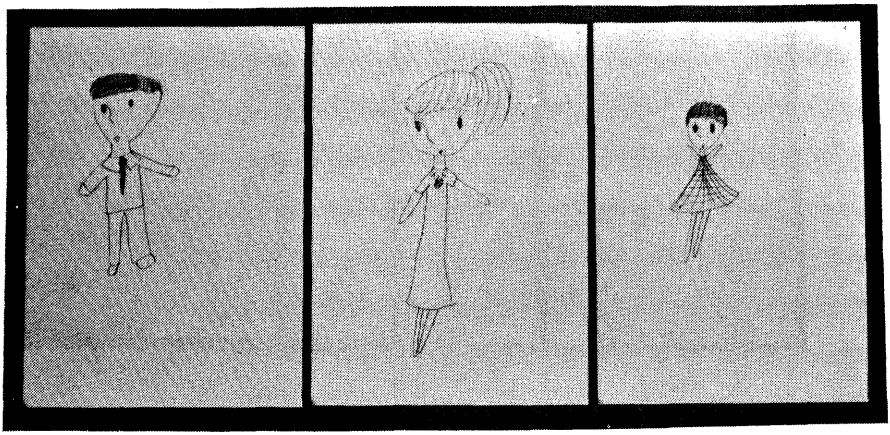


写真７　５歳11ヵ月女児　性別の表現が進んでいるばかりでなく、年齢差もかなり出ている

性別の表現は、いつごろから現われ、どのようなものであるか、またもし年齢差を表現するとしたら、どのようなかたちをとるのか……この疑問に対して以下の調査を藤沢市の私立Ｋ幼稚園で行なった。

調査とその結果と考察

標本は表１に示すとおりで、四歳四ヵ月から六歳三ヵ月までの二〇三名の対象児にクラス単位の集団でハリスの人物画検査を実施した。

作品は多くの場合、性別などに関係なく人体の示すポーズは三点ともほぼ同一であった。つまり十字架のように両腕を水平にした人体を描いている子の作品は三点とも十字架型であり、バンザイ型の子の作品はいずれも同じ

年少　C.A. 4：4～5：3
年長　C.A. 5：4～6：3

表１

	年　少	年　長	T
男　児	57	57	114
女　児	43	46	89
T	100	103	203

ポーズ……というような傾向が強かった。しかし同じ人体の構成であってもいくつかの異なった細部が認められ、こうした部分が男性・女性の表現とかかわっていることが多かった。一般に幼児がとりあげている性別の表示に関している部分を具体的にしるすと、第一がヘヤースタイルであり、第二がスカートである。そして人体を構成する主要部分の構成パターンは変化することなく、髪形や衣服等のごく一部だけを加筆するか、さしかえるかして男女の別を表示するにすぎない。しかし年長グループのなかには、描画の最初の段階――一般に人物画は頭部や毛髪のアウトラインから描き始める――で、すでに男女の画像を描きわけている例もある。（図1参照）このような例は決して珍しいものではないが、これは男性なり女性なりの画像がもつ概念的な映像やその表現形式がすでに成立していると解釈してよいだろう。

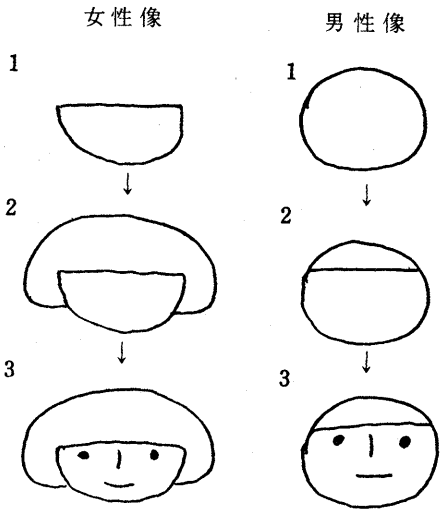


図 1

表2は前記の標本において男女の区別が表示されている作品の数を、年齢群別、男女別に示したものである。これによって年少グループから年長に向かって性別の表示が有意に増加していることがわかる。特に注目すべきは同年齢群では女児が優位にある点である。（1％水準で有意）年少女児はこの年齢水準で半数以上が性別を描きわけていると見なすことができる（C.R.＝1.676 5％水準）のに反し、男児は年長グループでさえ統計的には半数以上とはいい得ない。（C.R.＝1.192）この原因が何に由来するかをただちに理解することはできない。しかしこの一つの事実のみに基づいて人間像の描写に関して女児の発達が優先するかのように考えてよいものなのだろうか。

ハリスの人物画検査法では標準化標本における女児の各年齢群の得点の平均値は、それと対応する男児の年齢群の平均値より高くなっている。この傾向は男性像の平均得点の間にみられる差よりも女性像においていっそう顕著である。女児の得点が男児のそれをうわまわる傾向は、四十数年前のグッドイナッフ

表2　性別の表現

	年少			年長		
N	男 57	女 43	P	男 57	女 46	P
性の区別がある	18	27	★★	34	43	★★★
女性像はスカート	9	19	★★	25	42	★★★
女性像の髪が長い	11	24	★★	26	40	★★★
その他					4	

★は5％水準　★★1％水準　★★★は0.1％水準で女児が優位

の標準化の時にも現われたし、単にアメリカだけでなく日本の標準化（桐原）のさいにも同様の結果が得られている。そしてまた私の予備調査の標本（五歳から十歳まで男児・女児各六十名）からも同様のことがうかがえた。このように女児の平均得点が高く算出されてきた事実は、単に標準化のさいの標本に偶然のかたよりがあったためとは考えられない。このような平均得点の差が知能に基づくものでなく性差に基づくものであるならば、今回ハリスが改定したように、女児のための尺度と男児の尺度とは当然別に設定しなければならない。つまり従来のグッドイナッフの男女共通の尺度によってMAに換算すると、男児は女児より半年かそれ以上の知的発達におくれがあるとみなすこともできる。しかし人物画に性差が関与している以上このような断定はゆるされない。そればかりではなく人物画の発達を一次元的な直線上の前後関係として、単純にとらえようとすることが困難であるかのように思われてきた。以前私はかなりの点数の小学生の人物画を採点しながら、男児と女児との作品の間には見た目のちがいばかりでなく、かなり内容的な相異が感じられた。女児の作品は細部描写が緻密である。特にまつげ、ひとみのキャッチライトやくちびる、衣服のスタイルや文様、そして髪形など細部描写に関して女児ははるかに意欲的である。これに反して男児の作品は人体のプロポーションがややととのっているかのように見受けられた。そして女児の場合は一般に頭部を大きく描き表わしたり足が長すぎる傾向が強い。これらの諸点のいくつかは幼児の作品にすでに見られる傾向でもあった。このような採点時の経験をとおして、もしかすると男児と女児の人物画は幼児のころから全く同一のコースをたどって発達してゆくのではないかもしれない……という疑問をもつようになった。

たしかに一般に使用されている児童用の多くの知能検査では、

性差は現われないとされている。これは知能検査を作成する段階で、階層差、地域差、性差などの文化的影響の現われやすい問題はとりのぞくことが一般的な前提となっているためでもあろう。それでも検査を構成する個々の問題によっては性差が見られるとの報告も多いようである。ハリスの人物画検査における採点項目は、いわゆる一般の知能検査における下位項目の概念とはやや異なったものではあるが、同様に採点項目の中のいくつかには性差が現われるように思われた。ハリス自身その著書の中でこの問題にふれ、いくつかの項目では男女間の通過率に統計的な有意差が見られると述べている。そしてアメリカにおいて性差の現われた項目は、私の手もとにある標本においても類似傾向があるのではないかと予測するにいたった。

そこで男女それぞれの年齢群の各項目における通過率を算出し比較することにした。

第二の調査

さきに述べたように幼児が男性像と女性像を描きわけるためには小道具が必要である。つまりスカート・ハイヒール・ハンドバッグ・ネクタイ・パイプ、そしてヘヤースタイルなどである。ハリスの人物画法の項目には衣服やアクセサリーに関するものがかなり含まれている。男性像は73項目からなりたっているが、衣服に関する項目5、毛髪に関するもの4となっている。女性像にいたっては71項目中、衣服・アクセサリー・靴に関するもの17、毛髪に関するもの4となっており項目総数の1/4以上をしめている。もちろん幼児の人物画の発達段階では、その採点にあたって該当する項目数は五歳児でも全体の1/5から1/3程度の作品がほとんどで、該当項目の個人差によるばらつきを考えても幼児の作品の採点に必要な項目数は全体の2/3もあれば十分である。まして衣服などに関する項目の多くは採点基準が高く、幼児のほとんど全部の作品が該当することのない項目もかなり含まれている。それにもかかわらず二、三の衣服等に関する項目では通過率もかなりな数に及ぶものと思われたし、これらの衣服等に関する数項目に性差の現われる可能性が最も強いように感じられていた。

以上の経験的な観測に基づいて、性別の表現と衣服等の描写との関連性を次のように仮定してみた。……幼児の人物画の中で性別を描きわけているものは女児に多い。そして性別の表現は主として衣服やそれに類するものによって表示される。……とするならばハリスの人物画法における衣服関係の項目でも女児は優位を示すのではなかろうか。もちろん衣服の存在そのものをストレートに表示しさえすればよいということと、性のちがいを衣服によって表示することとでは、同じように衣服が描

かれていても内容が異なっている。このことは十分こころえているつもりであるが、一応今回は衣服関係の項目等の通過率を各年齢群の男女間で比較し、その内容を検討することとして次の作業を行なった。

標本は表3に示すように川崎市内の公立の保育園十四からなる幼児五五三名である。これらの作品は各保育園の担任の保母さんによって検査を実施したもので、まず採点し男女それぞれの年齢群ごとの通過率を算出した。ここに示すものは男性像の場合のみであるが、性差の現われたものを選んでしるした。

%

:11	5：0～5：11			6：0～6：4		
	M 90	F 78		M 39	F 34	
★★★	46	72	★★★	72	79	—
★★★	84	99	★★	89	98	—
—	46	61	★	64	79	—
★★★	58	67	★★	74	94	★
	18	27	—	23	58	★★
	19	39	★★	48	64	—
	32	22	—	48	32	*
—	71	65	—	76	69	—
	13	2	*	15	6	—

おおよそのところ項目5・18・19・55・56・63の6項目では女児が優位であるといえるが、項目10・47・48では統計的に男児が優位とはいえなかったが、さきにあげた藤沢市の幼稚園の場合では、この三項目は年長組では有意差が見られた。（女児の場合は幼稚園でも前記の6項目でほとんど同じ結果になっている）これらの項目の採点基準について少し説明すると次のようなものである。

項目5　目の細部　まゆかまつげ、またはその両方が描いてあること

項目18　毛髪が表示されていること

項目19　毛髪はおおむね頭の上方にあって「なぐり描き」的なものより進歩したもの

項目55　衣服が描いてあること。胴にボタンがならんでいたり帽子だけでもよい

項目56　すくなくとも衣服が二種以上。たとえば、帽子とズボン、ボタンとポケットなど

項目63　運動感覚の協応、描線がよくコントロールされていること、描線の正確さ

以上の六項目は女児の優位が認められたものである。

表３－Ａ　性差の現れた項目（保育園）

C. A.	3：0～3：11			4：0～4：	
項　　目	M 55	F 45		M 91	F 106
5　まゆ、まつげ	7	15		12	35
18　毛髪があれば良い	18	31	★★	51	73
19　毛髪が18より進んだもの	2	9		13	23
55　衣服が示されていること	1	7		13	33
56　衣服が２種以上	0	0		1	5
63　描紋の正確さ	0	0		1	8
10　鼻 two dimensions	8	0		8	6
47　胴の巾〈胴の長さ	12	12		48	40
48　½胴〉頭〉⅙胴	2	0		7	2

表３－Ｂ　性差の現れた項目（幼稚園）（％）

	年　少			年　長		
項　目	M 57	F 41		M 56	F 46	
10	19	17	—	48	19	＊＊
47	68	50	—	89	70	＊＊
48	30	2	＊＊＊	33	6	＊

表中の数はすべて％を表す
★　5％水準
★★　1％水準
★★★　0.1％水準で女児が優位
＊　5％水準
＊＊　1％水準
＊＊＊　0.1％水準で男児が優位
以上は出現頻数のカイ次乗検定によるもの

項目10　鼻がtwo dimensionsに描かれていること、(つまり点や短かい棒のような形ではなく、L字形でもU字形でも面積のあるものなら認める。但し鼻の低部の幅が鼻すじより短くなければならない)

項目47　胴のプロポーション、胴の長さが胴の幅より大きいこと

項目48　頭のプロポーション　頭の面積が胴の面積の½以下で1/10以上であること。

以上の三項目は男児が優位にあると思われるものである。

一般論として子ども人物画の発達過程は二つの方向を同時に進行させていると見なすことができる。一つは細部描写への過程であり、他は全体像的統合への過程である。つまり分析的と総合的との二つの方向である。例をあげて説明すると、分析的とは黒くぬりつぶした小さな円で目を表示する段階から、ひとみやまつげを描くようになったり、棒のような脚（Legs）のみであったものが足（Feets）を描き、やがてくつとなり、くつのかかとやひもを描写するようになる。このように部分の描写がより細分化してゆく発達を意味する。これに反して総合的とは、初め円形の顔であったものが縦長の楕円となり、正方形に近い胴が長方形となり、指や腕、脚の長さが太さより大きくなるというように、部分自体の縦横の比がほぼ正しく描写できるようになり、次に頭と胴・胴と腕・脚、あるいは腕と脚などのように部分相互の位置関係や量・長さの比が一層適確さを増してくる。そして全体像的なまとまりが成立するようになる。このようにより高次の部分に下位の部分が従属し全体像と部分との有機的関係へと発展してゆくことを意味する。

以上のような仮説にしたがって幼児の人物画の発達過程を考えるならば、男児も女児もともにここにあげた二つの側面を同時的に進行させていることに相異はない。しかしながら表3に示した結果から推論すると、女児は細部描写への分化を指向する傾向が強く、男児は全体像的総合への指向が強いかのように見受けられる。しかし今回の簡単な調査だけで軽々しく断定出来る性質のものではないので、今後の課題として項目分析や要因分析を加え研究を続けなければならない。

ただここで附記しておきたい点が二、三ある。先年私が本誌に報告したように、視点の統一や遠近の描写のように、部分を全体の中に統合し、位置づけてゆく構成は男児に優先性が見られたことである。「子どもたちが手をつないで大きな輪を作っている」絵と、「テーブルを囲んで子どもたちがおやつを食べている」絵を描かせたところ、女児には立画面と平画面の混用が全般的に見られたが、男児には画面すべての映像を立画面的に統一しているものが見られ、視点の統一に関しての優位性が

認められた。また他の機会に「赤ずきんチャンは森の中でお花をつんでいます。おおかみが木のかげからこれをのぞいています。遠くの方におばあさんの家が見えます」という教示に従って作画させたところ、赤ずきん・おおかみ・遠くの家――小さく表わす――を視点を統一させながらなんらかのかたちで遠近（透視図法的とはいえないが）の説明的描写を行なっているものは男児が優位であった。

このような傾向は他にも類似した報告が見られる。ミャラレは「読み方・書き方・描き方の実験心理学」の中でルロワ他による児童画における遠近法の発達の研究を紹介し、遠近の描写が知的発達と深い関係にあることを述べているが、掲載された図によって男児が優位であることを示している。

描画の問題とは焦点が異なるが、図形模写や図型認知に関する研究は多い。これらは描画の研究をはるかにうわまわっていると思われるほどである。そして文化差や性差にふれているものも見られる。

知能検査に現われる性差については一般にサーストンの因子分析にいうところの空間因子において男児が、言語に関する諸因子において女児が優先とされている。ベンダーは視覚運動ゲシュタルトの成熟過程そのものには文化差はなく、初めて鉛筆を持ったアフリカの未開の子どもたちもニューヨークの子どもたちも図形模写における一連の成熟段階は同一であると考えているし、コピッツはベンダー・ゲシュタルト・テストによる発達検査の作成にあたって性差を認めていない。（彼女が作成した人物画法の発達尺度では性差を認めている）

また、日本保育学会が編集した「日本の幼児の精神発達」の中に見られる図形模写に関する項目（円・正方形・三角形・菱形の模写）では性差は現われていないといえる。しかしながら田中敏隆は「図形認知の発達心理学」の中で――特に性差についての章をもうけている訳ではないが――結言の部分でわずかではあるが性差にふれ、男児の優位を述べている。また「図形概念に関する発達――発達段階と性差の検討――」では、二つの標準図形と五つの比較図形からなる九組の問題を課し、同一範疇に属する図形を選ばせる検査を行ない、図形概念の発達に関しては五歳から十四歳まで一貫して男児が優位にあるとしている。

この他にもいくつかの報告が見られるが、文化的影響を受けやすいものほど性差が現われやすい傾向にあるように思われる。これは幼児期における性差は主として文化的影響によって生じるという考えとも一致する。描画の領域、特に人物画とか遠近法は文化的歴史的背景によって成り立っているので、人物画を対象としながら、文化的要因を全くとりのぞいた検査法や実験

法を考えることは不可能に近い。幼児の臨床場面における行動観察に基づいて項目を設定していった津守真・磯部景子による「乳幼児精神発達診断法」では、構成あそび・絵画・製作の領域でかなりの性差が見られる。

要約と考察

幼児がどのように性別を描きわけているかを調査したところ、女児は幼稚園の年少グループですでに半数以上が、なんらかのかたちで男女の画像を区別して表示していたのに反し、男児は年長グループでさえ、統計的に性別を描きわけているものが多いとはいえなかった。性別を描きわける手段として幼児一般に見られる傾向は髪形や衣服によっている。そこでハリスの人物画法における男性像の採点項目の通過率によって比較したところ、女児は衣服、毛髪に関する項目で優先していることが認められた。これは予測されたことであったが、他の保育園の標本でもほぼ同様の結果が得られた。

しかし、ここで新たに別の問題が現われた。一つは女児が描線の正確さを意味する項目ですぐれている点と、男児が人体のプロポーションの把握にまさっている点である。

以上のように幼児の人物画における性差に基づく相異点を例記してみると、幼児画の発達が指向している方向が多様であり、幼児期を成り立たせている要因が多いと考えざるを得ない。ここでは便宜的に分析的方向と統合的方向画を想定し、前者は女児に、後者は男児においてより強い傾向を示すのではないかと考えてみた。この問題は今後因子分析などによっていっそうほりさげてゆく予定である。そして抽出された因子と性差を関連させて検討してみたいと思う。もしこのようにして描画における性差の様相がいっそう分析的に明確になるならば、グッドィナッフがかつて指適したように性向尺度（masculinity-feminity scale）のような診断技法も可能かもしれない。それ以上に精神薄弱児や情緒障害児の発達のゆがみの診断に役立つかもしれない。私の夢は野放図もなく広がってゆくが、現実は未採点の標本にとりかこまれ、何から手をつけてよいのか困惑している状態である。

先日、日本社会事業大学附属の「のびる学園」を訪れた。この学園は自閉症のみを対象に、石井哲夫教授を中心として治療教育を行なっている。そこで見せられたある女児の描いた人物画は変わっていた。それは一つの人体に男性の性器と女性的な乳房とが同時に表わされていた。同学園の先生のお話ではこの女児は特に注意しないかぎり、いつも両性を同時化してしまうとのことであった。あたかもギリシャ末期の彫刻に見られるヘルマ・アフロディーテ（男性神ヘルメス・女性神アフロディー

テとを一体化したもの）のごときものである。年少幼児の描く人物画に性別は示されていないが、この自閉症児の描くヘルマ・アフロディーテ的画像には性の表示がありながら性別が成立していない。この事例は多くの示唆に富んでいると思われる。自閉症児には同一視や性的同一化あるいは性役割の習得が全く欠けているのではなかろうか。対人関係の障害がこのような作品となったと見なしてよいのではなかろうか……。この一例のみからあまり多くを推量することはつつしまなければならないが、障害の側から人物画の性別の表現などをとらえて社会性の成熟と関連させてみることもまた必要であろう。

参考文献

ベンダー・L　高橋省己訳　児童精神医学の技術　1971　関書院

Harrio, D. B., Children's Drawings as Measures of Intellectual Maturity; 1963, Brace & World.

ハリス・D・B・津守真　児童発達教育学　1970　光生館

岩脇三郎　知能検査入門　1971　日本文化科学社

Kellogg, R., Analyzing Children's Art; 1970, National Press Book.,（和訳　深田尚彦訳　児童画の発達過程）

桐原葆見　精神測定　三省堂

Koppitz, E, M., The Gestalt Test for Young Children 1967 Grune & Stratton

〃　Psychological Evaluation of Children's Human Figure Drawing. 1968 Grune & Stratton.

ミャラレ　読み方・書き方・描き方の実験心理学　現代心理学Ⅷ・言語とコミュニケーション　1971　白水社

日本保育学会　日本の幼児の精神発達　保育学講座9　1970　フレーベル館

津守真　磯部景子　乳幼児精神発達診断法　1965　大日本図書

田中敏隆　図形認知の発達心理学　1966　講談社

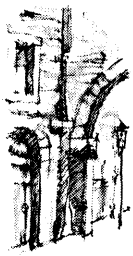
〃　図形概念の発達――発達段階と性差の検討――心理学研究　1970　40, P.314～322

渡辺秀敏　知的機能における男女差　性差心理学　1970　朝倉書店

「ヨーロッパの幼稚園」

リヨンで見た言語教育

村石昭三



私たちがおもに訪れた先はリヨン(仏)とフランクフルト(西独)の幼稚園であった。リヨンの方はおもに教育内容を中心にし、フランクフルトの方はおもに宗教教育を中心にした見学であったから、私の専門からして、リヨンでみた言語教育について述べようと思う。

私たちは滝沢武久氏(電通大)にすっかりお世話になりながら、幼稚園を見てまわったが、リヨンで得たことは、子どもに対することばのしつけがきびしくて、おまけに日課が言語、数を中心にがっちり組まれていたという面である。暗唱、朗読を中心に言語の教育が進められ、文字は書くことからはいって、読む指導にはいるのが五歳で行なわれていることであった。見ていて肩がはる思いがするときもあった。ところが絵本の指導がほとんど見当たらぬことは、いささか拍子抜けしたりもした。それでこれらのできごとにどう脈絡をつけるかに、私の見た「ヨーロッパの幼稚園」見学は終始してしまったようだ。

1　暗唱と朗読

最初に訪れた園は静かな高台の団地の側にあって、フージェール幼稚園といった。四歳クラスで人形劇を先生がやってみせていたが、一区切りしてから、子どもたちに一人ずつ、その劇の一小節を暗唱させはじめた。教師は腰かけ、子どもが暗唱するときは、手をしっかり握ってやっていた。その子は握られた手に助けられてか、おそい口ぶりではあったけれど、つっかえ、つっかえしながらも暗唱し終えた。そして、「ボン」という教師

の声に、満面に喜色を走らせた。

どの園でも、五歳クラスでは教師が短い文や文章を板書し、それを朗読または暗唱させていた。ジャガール幼稚園では、花をテーマにした単文で、次の詩があった。

ひなぎくよ
お前は美しい
お前の花びらは
蝶の羽のように
うすい

ベーズ幼稚園には「星の王子さま」の作品の一節もあり、モッパッサンのことばも板書されてあるのを見たりした。

日本でも幼児に詩を読んで聞かせようということがいわれている。日本的にはたいへんロマンチックな発想で、しかも詩だけをとりあげる風潮にあるのだろうが、ここではだいぶ違っている。リヨンの幼稚園の場合には、いきなり詩にははいらない。花の詩にはいるいきさつは、まず、月間テーマに花というのがあって、花の絵をかく、製作をする、また自然観察の諸活動の一つとして、花をうたった詩が与えられ、暗唱・朗読をするわけである。いわば、その単元テーマの象徴（シンボル）活動として、特定の文章の暗唱、朗読があるのであって、その文章は詩であろうと、散文であろうと別にかまわないわけである。ファージェール幼稚園の人形劇の例でも、その劇のシンボルとするにふさわしいせりふなり、地の文が暗唱されていたのである。

子どもはよく童話を聞いて、即興的なせりふや身ぶりをしてみせるが、それをきちっとことばに換元させるところにフランスの教育の特徴がある。現代数学の集合遊びで、特定の形・大きさ・色の積み木をとる場合も、いちいちその属性を口でいわせていた。一度はことばに換えさせて、ことばに換元できることが認識なのだと考えるようだ。

ことばに対する愛着をもち、ことばのしつけを重視する国民、そしてフランス語の栄光を感じ、それを子どもに語りつごうとするのがフランス人である。美しいことばは口に、そして楽しいときに口ずさむのがシャンソンなのかと思ったりさせられた。美しいことばは口ずさもうという言語習慣はよいものだなと思ったりもした。

暗唱・朗読にはもう一つ、それによってフランス語の文法、構文をきちんと子どもに入れるための学習法として成立することにも注目したい。とりわけ、散文の板書したのを朗読することは、このねらいと結びつけないと納得がいかない。

要するに、幼児のうちから、ことばはきちんと入れなければ

いけないという考えに貫かれているようだ。ことばをとにもかくにも正確に使わせることが、ことばを大きくなって考える道具とする上で、大変重要なことだと思っているらしい。日本のように、ことばの使い方は多少はいい加減にしておいても、子どもの発想の方を大事にするのとは根本が違っている。一つ一つのことばの使い方をルーズにさせたまま、大きくなってどうしてことばが考える道具として通用するのか、フランス人にはさぞ不思議なことであろう。

2　文字の読み書き

文字は五歳児からの保育内容にはいっている。リヨン教育センター近くのジャンドラ・ホンテ幼稚園で、私たちの仲間が日本の絵本を先生にあげたら、早速少し年とったその教師は黒板に「私たちは日本の紳士から、たいへんきれいな本をもらいました」という書き出しで数行にわたって板書をした。教師がゆっくりと読み、あと数人の子がかわるがわる立って読んだ。そして、その後は、その文章を使って、同じ音（日本のかな文字に相当する音節）の抽出にまで発展させるなど、たいへん手なれた感じであった。

どの園でも文字はとり扱っていたが、そのやり方をみていくと、次のような指導過程があることがわかった。

(1)　教師の範読（板書した文章や詩について）
(2)　幼児の読みや暗唱
(3)　同じ音節の抽出
(4)　能力別の学習作業

上グループ―板書文の聴写や構文練習
中グループ―板書文の一部または全部の視写
下グループ―積木や絵カードによるレディネス作業

およそ日本の幼稚園にみるような、室内、園庭などに幼児名、植物名などの「標識いっぱい」という風景は見られなかった。それはそのはずである。そのような文字の扱いなのだから、わざわざもってまわって文字環境などといわなくてもよいからである。

「なぜ、文字を教えるのか」というのは、私たちがいつも用意した問いかけであったが、必ずしも確答は得られなくて、もどかしかった。ただ一つ、はっきりしたことは、知的な教育に文字が必要だとか、文字を教えないと小学校の教育についていけぬとか、親がうるさいからというのは彼女らの口からは何も聞かれなかったということである。そこには、日本的な文字教育にみられる熱っぽさはなかった。なぜ、日本の一部分にお

いてはこんなに熱っぽくなっているのかと考えると、幼児に対する文字教育の禁令（？）という思いすごしのせいか。あるいはかな文字を知ればただちに文章の読みにはいれるという、文字功徳を知りすぎたためであろうか。

要するに、フランスにおいては、文字というものもはじめからきちんと覚えさせるという点では、話しことばの発音と同じ考えなのである。同じ単語や自分の名まえを何回も時間をかけて書かされている姿はいたいたしげに見えたが、このことはおそらく、最初からことばはきちんと教えるものという、この鉄則のもとに文字も正しく教えることに結びついているようである。この鉄則の前にはことばも文字も分けへだてないようだった。

ただ、日本の一部の運動家のように、一字一字の読み書きを教えるだけが文字指導だと考えるのとは違っていた。暗唱、朗読と同様に、ある単元テーマにそった活動があって文章が板書され、それを文字のレベルにまでおろしてやるという扱い方であった。

きちんと読める前から、書く活動があるのが珍しかったが、これは一種の線書き遊びであるし、暗唱と同様な考えによる視写だと思えばよいであろう。日本的な発想だと、幼児には日常書く生活やその機会が少ないのだから、書くのは必要なく読みだけでいいのではないかということになるが、ここでは文字をきちんと覚える手だてとしてまことに重要であって、書く活動を生活にまで反映させるという考えはもともとないようであった。

3　ことばのしつけ

ところで午前のこうした保育を見ながら、一つは幼児がこの活動に堪えられるように、そのもとになるしつけがうまくいっていないとだめだということと、そこまで徹底させる信念みたいな何かがなくては成立するまいということが思われた。

子どものしつけ方はどこの園でもきびしかったといえよう。子どもが暗唱するときは、回りの子どもたちは私語することを許されず、少しでも何か口にしようものなら、ただちにシーッという声と、口を手でタテ十字に切るきびしい表情の教師の顔があった。おそらく、これだけのきびしさがなければ上述の言語教育はうまく行なわれないだろうし、逆にいえば、きびしいしつけと発音、文字を正確に教えていく教育内容とがきびしさという点で符号するのだと思われた。

もっとも、それは幼稚園できびしくしつけるというよりは、

私の印象では、教師がそういう態度で臨みうる何かが子どもの側にもつくられていて、その上で当然のごとく行使されているとみられた。その当然さというのは家庭教育のしつけの厳格さというものに違いない。この点、家庭をのぞかなかった私にはよくは分からないけれど、ただ、バスの中で絶対に大声でしゃべることのない市民生活を目にしながらも、そういった家庭教育のしつけの一端というものをかいま見るような思いがした。

日本の幼稚園が家庭のしつけまでしょいこむ形になっている機能をもつかぎりは、しつけのきびしさを前提にした「冷えた保育」は不可能であるし、本来、子どもには甘く対する日本の生活習慣があるかぎり、保育のしかただけ変えてもそれは筋違いというものだと思われた。

リヨンの幼稚園のしつけのきびしさにくらべて、フランクフルトの場合はだいぶ日本的であった。自由であった。たまたま、見かけたことであろうが、ある幼稚園で子どもに童話を聞かせていた。そのとき、ある子はキャンディをなめなめ、ある子は机の上にのって話を聞いていた。それを教師は少しも注意しなかったのである。さっそく、これが私たちの質問の矢表に立たされた。ああいうことはいいことかと尋ねると、そこの教頭先生は、いいとは言えない。しかし、それを幼稚園は家庭に注意をすることはできるが、直接のしつけは家庭の仕事であって、幼稚園ではないと割り切っていた。これをドイツ風の割り切り方というものかと思った。

割り切り方といえば、文字のことを尋ねたら、これは小学校でやることだと言う。子どもが字を知っているのに教えぬのを変に思わないのかと尋ねたら、逆に小学校でやるものをわざわざ幼稚園でやろうとするのはどういうことかとひどく不思議がっていた。

しつけについて今一つ指摘したいのは、リヨンの幼稚園のきびしさは午後の保育をみていると日本的な意味でのきびしさとは少し違うように思われた。リヨンの幼児教育には何か「時間をかける」ということの重みを感じた。絵画製作でも子どもに一週間も、もっと時間をかけて同じ絵、同じものをつくる仕事を続けさせるのだったが、伝統を伝える、文化を継承するいとなみとしての教育は、人間がいかに幼児のうちから、「時間をかける」ことの生活態度をしつけの基本にしみこませているようだった。時間をかけるということは、人間の歴史を教えることにつながるともいえるであろうか。

4　絵　本

もう一つ、不思議に思ったことは、二週間余りも幼稚園をまわりながら、絵本を扱う場にほとんど出合わなかったことである。フランクフルトの幼小一貫教育をしているリンネ・シューレでだけ、「ピーターと狼」の絵本で、教師がその文章に合った調子で読み聞かせたすばらしい場面に合ったがそれだけであった。日本のように保育絵本という商業ベースの伝統がなかば公式化した姿に見なれた者にはどこかさびしい感じさえしたが、少なくとも次の点は重要なことだと思った。

もともと、絵本は子どもが各自で午後の自由な時間に見るか、あるいはたまたま教師がストーリー・テリングのときに使うときのほかは必要でないのである。それに最も重要な事情だと思ったことは、リョンの場合言語教育が言語そのものの構造の学習に中心があって、話す聞く言語活動の教育がないか、あるいは非常に乏しいという事実である。昔のある時代の日本の言語教育が童話を聞かせるだけ、あるいはことばづかいを矯正することだけを考えていたときがあったように、リョンでは家庭のしつけによって、正しいことばと文字とだけ教えるのが言語教育だというような進め方をしている。いまの日本の場合は、言語活動中心の言語教育である。聞く、話す、また絵本を見るといったことばの諸活動を通して、たとえば知的能力や社会的発達をはかるとか、言語能力的にいえば、ことばを通して、ものを知り（認識）考え（思考）伝え（伝達）そしてつくる（創造）という能力を身につけさせ、そして、その活動に正に適うだけの日本語の構造を身につけさせようとするわけである。それにことばのしつけまでしようとするわけだ。これが日本の言語教育であって、フランスの場合は、ことばのしつけの上に、ことばの構造要素の指導が位置づけられているのであって、日本のような多様の言語活動の教育というものをリョンでは見ることができなかった。

それはちょうど、ラテン語の教育が今もって小学校で行なわれなければならぬと考える古い考え方がまともに受けとられるとともに、一方の進歩派はルーシェットプランという改革案で言語活動の教育を主軸にしようとする運動があるようだが新旧のこの交錯のなかに「病める言語教育」の病根を見た思いだった。

5　ことばとは何なのか

では、何ゆえに、幼児のことばの教育に、リョンではこれほ

ど言語そのものの構造要素の教育を大事にしなくてはいけないというのであろうか。

第一は伝統なり、文化の継承のために言語教育を位置づけているということにある。それがフランスの言語教育だ。ところがフランクフルトの場合には、急激な経済の発展と繁栄のあまり、教育の使命は変貌するに違いない未来社会に適合できる子どもを作るために、教育はどうあるべきか、言語教育はどうあるべきかということが課題になっている。フランスの場合には、未来社会というよりも、伝統文化を、歴史を、その栄光をどのように継承させるかという点に教育のはじまりがあるという発想に立っている。伝統と文化の継承はまさに言語教育の責任なのである。

第二はフランス語を伝えるという、極端なまでの母国語に対するエリート意識があることである。言語は伝統、文化を語りつぐ道具であるとともに、文化の形象そのものが言語であるという考え方である。日本的な発想からすれば、言語は思想・思考を伝える道具なのだけれども、フランス的な発想では思想・思考の様式を決めるわく組として言語があると考えているようだ。この点、私たちは言語教育でことばを思想・思考を伝える道具として、それがうまく使いこなせるようにということを期待したのだけれども、根本的に、日本人の思想・思考のわく組を実は日本語が決めているのだ。日本語でしか日本人は考えることができないのだという原点を確認しなければならなかったのではないかということを思う。

第三の問題は、ヨーロッパという隣国と地続きで相接する国が互いに自衛としてもち続け得ることは、その国の言語だけだということがある。ここには他国と自国を峻別する独立と排他主義が国民の意識として根底にあると思われた。フランクフルトでは西ドイツの伝統的な家庭教育を乱すのは外国人労働者だという考え方もあると聞かされた。「一クラスの中でひとりひとりの幼児の髪の毛が違う、この幼児たちに教え得る、いや、教えなければならぬことといえば、フランス語の教育なのです」と説明してくれた教師のことを思い出し、その教育の中に国民の民族意識に貫かれた何かがあるのを感じるのであった。

ヨーロッパはまことに狭い。飛行機でひとたび舞いあがれば、そこは他国の空だという感じがしたが、そんなところでの国の烙印はもはや言語だけしか求められないというのであろうか。

（国立国語研究所）

ますが、あのころからこういった流れが続いているのかとおもしろく思うこともあります。

あのころはときどき目新しい材料として、もみじやいちょうの葉などにえのぐをブラシで吹きつけて型をとったりしてあそびましたが、その思いがけない美しさにも目を見はる思いでした。また粘土細工では、当時は竹べらなども使っていましたが、あの粘土の感触が大好きで、とても興味ある材料だったことは今の園児と全く共通しております。

それにしても、幼稚園の庭というのは何という魅力的なものだったことでしょう。今もほとんど当時と変わらぬ姿で子どもたちを迎えておりますが、私が幼かったときはあれほど親しみ深かったにもかかわらず、園の庭の全景というものはとても広くてとらえることは出来ませんでした。ただ四季おりおりの手入れのゆきとどいた広い庭が、部分々々として心の中に残っています。六月になるときれいな紫の花の咲く藤棚があって、そのころは大きな藤豆がたくさん、ぶら下がりました。もちろんとってはいけないことも知っているし、手もとどきませんでしたので、どこかに一つでも落ちていようものなら宝物でも見つけたようにうれしかったものです。それからいつも水の満ちている池やバラの家なども大好きでした。そしてそのころも大きないちょうの木と山があったのですが、そこまで行くのは私にはとても遠出に思われて勇気がいりました。今の子どもたちはあのころよりずっと活発であるし、成長も早いので一人でも山まで出かけますが、あのころを思い出すと何だか不思議なような気がします。でも今でも「先生、お山へ行こう」といって手をしっかりにぎりしめながら山へ行く道を登る子どもや、また私がついてくるかなとふりかえって確めながら歩んでいく三歳児の姿には、あのころの自分をふと思い出させるものがあります。

幼稚園の庭であそんでいたころのことは、何かふわっとかすんでしまうことも多いのですが、はっきり思い出しきれないだけにとても楽しかったこととして残されています。そして現在も附属幼稚園では、出来るだけ自分たちの活動を主体として自由にのびのびとあそぶようにと進めていますが、この流れの源はあの当時からつながっているのだと思います。それだからこそ、幼稚園のころのことを思うと何かみち足りた思いがよみがえってくるのでしょう。

こうした毎日の中で新庄先生は、い

つもにこやかに私たちを迎えてくださいました。そのころはお着物にはかまをきちんと召しておられた美しい先生でした。けれど私は性来人見しりが強い上に、女の子の中では二月末生まれの一番ちびだったせいか、いつまでもなれないで母の着物の袖をぎゅっとにぎっていたようです。そのせいか、今でも園になれにくい子どもがいると何だかその気持がわかるようで同情してしまいます。しかしそのうちにだんだんと日がたつと元気が出てきました。現在は男女ほぼ同数で三十五人の編成ですが、当時の一部では男子二〇人、女子一〇人の級でした。それで当然男の子ともあそぶようになります。なかでも私は兄がいたせいか仲のよかったのは男の子仲間であったようで、あまりへやにもよりつかないで終日どこかであそび暮していたようです。

そのころは、女高師には四年毎に皇后陛下の行啓がありました。そして附属にもおいでになるので、その折の先生方の御心づかいはとても大へんなことだったと思います。頂度在園中に行啓にめぐりあわせた年でしたから、きっと私などもお行儀よくしていられるかどうかとご心痛をおかけしたことでしょう。

はからずも附属幼稚園で新庄先生の後を歩むようになりましたので、私は園で時々お目にかかっておりましたが、そうした最近の先生よりも、今私の中にいらっしゃる新庄先生は、やはり私の幼児だった時代に、きちんとはかまを召されたりりしいお姿の新庄先生なのです。たくさんの楽しい幼稚園生活を過ごさせていただいたことを改めて御礼申し上げるとともに、心からご冥福をお祈り申し上げたいと思います。

幼児の教育　第七十一巻

五月号　定価一〇〇円

昭和四十七年四月二十五日印刷
昭和四十七年五月　一　日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

昭和47年度　現代幼児教育研究会日程

ことしの全国大会は

豊かな民話のくに岡山で!!

●全国大会

開催地

岡山市　**岡山市民会館**

日　時

8月1日(火)・2日(水)・3日(木)

主題：幼児の発達をはばむものは

●2月例会

盛会裡に終了

開催地

長崎市　**長崎国際文化会館**

日　時

2月20日(日)

●5月例会

開催地

新潟市　**新潟市公会堂**

日　時

5月14日(日)
AM 9:30～PM 4:00

●11月例会

開催地

大宮市　**大宮市民会館**

日　時

11月12日(日)
AM 9:30～PM 4:00

主催　フレーベル館現代幼児教育研究会

いずれ詳しいご案内パンフレットをおとどけいたします。

★キンダー砂場セット（新型）

カラフルで丈夫なプラスチックの特長を生かし、数々の新しいアイデアを盛り込んだ砂場用品の決定版です。砂型は1個から2つの型がとれます。バケツは注ぎ口のついた大きくて丈夫なものです。フルイも本格的な金属網ですから目づまりがおこりません。シャベルは握りやすく掘りやすいデザインです。

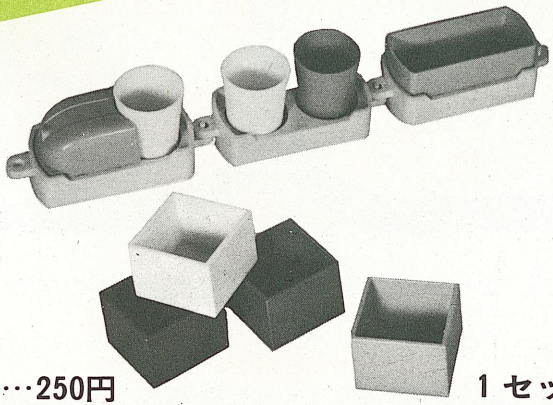
1セット内容 単価

- 砂型（4種1組）
  10組……1,500円
  （スチロール）
- フルイ
  10コ……1,350円
  （スチロール）
- シャベル
  赤・青……各550円
  （スチロール）
- バケツ
  4コ……1,000円
  （ポリプロピレン）
- 整理用カゴ
  2コ……1,000円
  （ポリエチレン）

1セット……6,000円

カラフルな最新型誕生 砂場用品

★砂型トレイン



砂場で遊びやすい底の平らな車体に、砂場セットと同じ砂型を3個と大きな箱型がのせてあります。楽しいスマートなデザインで、美しく丈夫なスチロール樹脂製です。

スチロール樹脂製
1セット……1,100円

★ます

赤・黄・青・緑の美しいプラスチック製です。丈夫で耐水性もあり、永く使用できます。

プラスチック製
4コセット……250円